

立科町

ARAJOUMINE

# 新城峰遺跡

防災・安全交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
国道 254 号 立科町 宇山バイパス

2016.3

長野県佐久建設事務所  
長野県埋蔵文化財センター



新城峰遺跡全景（東上空より）



新城峰遺跡出土遺物

## はじめに

国道 254 号は長野県と首都圏を結ぶ幹線道路であるとともに、地元にとっては重要な生活道路でもあります。

今回、立科町宇山バイパス建設に伴って新城峰遺跡の発掘調査が行われました。本書はその発掘調査の成果を報告するものです。

蓼科山の裾野に位置する立科町は、近世には中山道の芦田宿がおかれ、笠取峠の松並木は当時の面影を今もとどめています。これをさかのぼる中世には、遺跡の所在する山部には津金寺が栄え、境内に多くの石造物がのこされています。

新城峰遺跡は、遺跡の名が示すように中世の山城に関係する遺跡ではないかと考えられていましたが、調査の結果、山城ではなく、中世の竪穴状建物跡などからなる集落跡であることがわかりました。立科町でははじめての中世集落跡の調査例となりました。

この集落は中世後期の室町時代の短期間に営まれた集落である可能性があります。また、わざわざ周囲を谷に囲まれた尾根の斜面につくられていて、周辺に広がる平坦地から逃れているようにもみえます。世情不安定な時代に生きた人々の生活の一端を示すものといえます。





調査内容の詳細につきましては、本書をご覧くださいと思いますが、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘から整理作業、本報告書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました長野県佐久建設事務所の方々、長野県教育委員会や立科町教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

## 例言

- 1 本書は、長野県北佐久郡立科町に所在する新城峰遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国道 254 号宇山バイパス建設に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第 1 章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』31 で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000）、立科町地形図（1：5,000）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は、世界測地系を用いている。
- 6 発掘調査にあたっては、以下の機関に業務委託した。（敬称略）  
測量・空中写真撮影：(株) 写真測図研究所  
自然科学分析：(株) パレオ・ラボ
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表す。（敬称略）  
藤澤良祐、西藤五郎、斉藤恵、西藤泉、立科町教育委員会、長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会（小野昭、笹澤浩、会田進）
- 8 発掘作業・整理作業の担当者は第 1 章に記載した。
- 9 本書は、調査研究員廣瀬昭弘が執筆・編集し、調査部長平林彰、調査第 1 課長岡村秀雄が校閲した。
- 10 本書に貼付した DVD には、以下の内容を収録した。  
本文 PDF ファイル、写真データ、自然科学分析報告書

## 凡例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付してある。
- 2 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。
  - (1) 遺構図  
調査区全体図 1：600、竪穴状建物跡・掘立柱建物跡・溝跡 1：80、土坑・土器集中・礫集中 1：40
  - (2) 遺物図  
土器・陶磁器 1：4、小型石器 2：3、磨石・敲石等 1：3、台石等 1：4
- 3 基本層序及び遺構埋土の色調は「新版 標準土色帳」による。
- 4 実測図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。
  - (1) 遺構図  
地山 
  - (2) 遺物図  
①土器 黒色処理  陶磁器断面  ②石器 磨面・砥面 
- 5 遺構実測図中の遺物記号は、以下のとおりである。  
● 土器      ■ 石器

# 目次

巻頭図版

はじめに

例言・凡例

目次

## 第1章 調査に至る経緯

第1節 事業の概要と保護協議	1
1. 宇山バイパスの事業計画	1
2. 埋蔵文化財の保護協議と調査	1
3. 文化財保護法の手続き	2
第2節 発掘作業と整理作業の体制	2

## 第2章 調査の経過

第1節 発掘作業の経過	3
1. 発掘作業の方法	3
2. 日誌抄	4
第2節 整理作業の経過	4
1. 整理作業の方法	4
2. 日誌抄	4

## 第3章 遺跡の環境と概要

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境	5
第2節 遺跡概要	5
1. 遺跡概観	5
2. 調査の概要	7
3. 基本層序	7

## 第4章 遺構と遺物

1. 竪穴状建物跡	9
2. 掘立柱建物跡	12
3. 土坑	13
4. 溝跡	17
5. 土器集中	17
6. 礫集中	19
7. その他	19
8. 遺構外	22

## 第5章 科学分析

1. 放射性炭素年代測定	26
--------------	----

## 第6章 総括

写真図版

抄録

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 事業の概要と保護協議

### 1. 宇山バイパスの事業計画

国道254号は都心から埼玉県・群馬県を經由して長野県松本市へ通ずる幹線道路であるとともに、立科町西部では重要な生活道路となっている。立科町内の現道は幅員が狭いうえに急カーブも多く、通行の支障となっている。宇山バイパスはこのボトルネックを改善するために長野県佐久建設事務所が計画している道路改良である（第1図）。

### 2. 埋蔵文化財の保護協議と調査

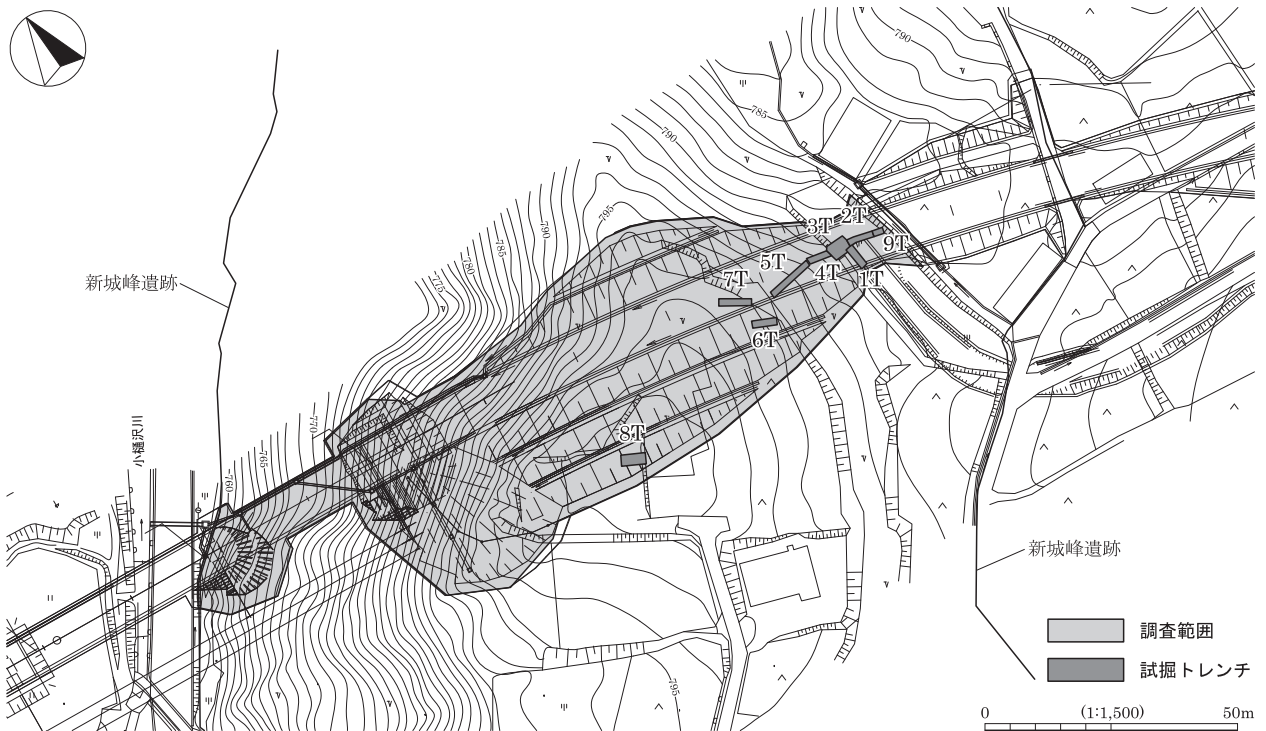
新城峰遺跡の所在する立科町大字山部字新城峰地籍は長野県佐久建設事務所による国道254号宇山バイパス建設予定地に当たっており、事業の進捗に合わせて、長野県佐久建設事務所（以下 佐久建）、立科町教育委員会（以下 町教委）、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下 県教委）による協議が続けられてきた。

平成25年度、事業が当該地に及ぶこととなったことから、町教委が平成25年11月から平成26年1月にかけて試掘調査を実施した。試掘調査は事業地の尾根に9本のトレンチを設定して行われ、調査の結果、尾根東側斜面で中世の内耳鍋片が出土し、尾根頂部付近では低い土塁状の高まりが確認された（第2図）。

この調査状況に基づき、平成26年1月15日、事業主体の佐久建と町教委、県教委、長野県埋蔵文化財センター（以下 埋文センター）の四者による協議がもたれた。協議では試掘調査の結果を受け、新発見の「新城峰遺跡」として登録すること、国道254号宇山バイパス建設にあたっては、遺跡を記録保存とすることが決定した。町教委では調査体制が整わないため、埋文センターが調査を受託して実施することとなった。



第1図 事業計画



第2図 試掘調査の概要

### 3. 文化財保護法の手続き

本遺跡の文化財保護法に基づく届け出等の手続きは以下の表のとおりである。

土木工事通知(法94条)	県教委勧告(法94条)	発掘届(法92条)	県教委指示(法92条)	埋蔵物発見届	文化財認定
文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付
25 佐建第 380 号 (H26.3.17)	26 教文第 8-1 号 (H26.4.7)	26 長埋第 14-3 号 (H26.4.30)	26 教文第 6-3 号 (H26.5.13)	26 長埋第 15-9 号 (H26.11.13)	26 教文第 20-72 号 (H26.12.1)

## 第2節 発掘作業と整理作業の体制

本遺跡に関する調査・整理体制は以下の表のとおりである。

	H26	H27
所長	会津敏男	会津敏男
副所長兼管理部長	多城 哲	多城 哲
管理課長	村山清治	山本希一
管理課長補佐	山本希一	望月英夫
調査部長	大竹憲昭	平林 彰
担当課長	岡村秀雄	岡村秀雄
担当調査研究員	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘
	大澤泰智	

## 第2章 調査の経過

### 第1節 発掘作業の経過

#### 1. 発掘作業の方法

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則って実施している。

##### (1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、新城峰遺跡（あらじょうみねいせき）、遺跡記号：DAMである。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るためアルファベット3文字で表したもので、1文字目の「D」は長野県内を9地区に分割した佐久地区を示し、2文字目・3文字目は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。

##### (2) 遺構名称と遺構記号

遺構記号は、種類毎、検出順に付した。今回の調査で用いた遺構記号には以下の種類がある。

SB：竪穴状建物跡、ST：掘立柱建物跡、SK：土坑、SD：溝跡、SQ：土器集中、SH：礫集中。

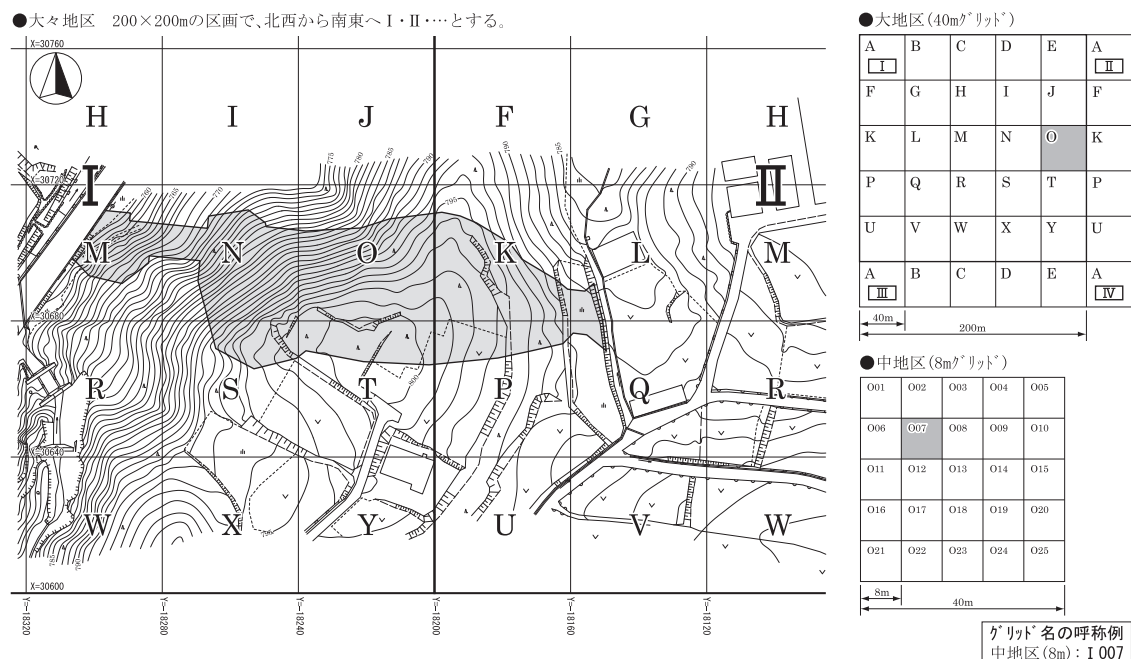
##### (3) 調査区（グリッド）の設定と呼称

国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点（X = 0.0000、Y = 0.0000）を基点に、200の倍数値を選んで測量基準線を設け、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定した（第3図）。

大地区は、200 × 200mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ…のローマ数字で表記。

大地区は、大地区を40 × 40mの25区画に分割し、北西から南東へA～Yのアルファベットで表記。

中地区は、大地区を8 × 8mの25区画に分割し、北西から南東へ1～25のアラビア数字で表記。調査ではこの中地区を遺構測量等の基準・単位とした。座標値は世界測地系である。



第3図 グリッド設定図



(4) 遺跡の発掘

町教委の試掘調査結果を基に、立木の伐採に合わせて現地踏査を行い、その後重機による表土剥ぎを実施し、遺構検出・遺構調査を実施した。遺構の測量は、調査研究員及びその指導のもとに発掘作業員が行った。調査中の写真撮影は、6×7判カメラ、一眼レフデジタルカメラを併用して撮影した。調査区の全体写真は業者委託のラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

(5) 遺跡の公開

現地調査期間中、8月5日に町教委主催の遺跡見学会を実施し、参加者の発掘体験も行った。9月29日には立科町文化財保護委員、たてしな歴史研究会会員の見学会、9月30日には佐久建の見学会を実施した。10月25日には地元町民を中心とした現地説明会を開催し、55名の参加者があった。開催にあたっては町教委山浦氏の多大な協力があった。出土遺物は平成27年1月に開催した埋文センター展示会「掘るしん」に展示公開した。また、2月22日にはたてしな町民歴史公開講座で調査の概要を報告した。

## 2. 日誌抄

平成26年		9月30日	佐久建 調査見学・研修
6月10日	佐久建・町教委・埋文センター・伐採業者による現地確認	10月17日	空中写真撮影を実施
6月17日	立木伐採作業開始	10月25日	現地説明会を開催 参加者55名
7月22日	重機表土掘削作業開始	10月31日	発掘作業員作業終了
8月4日	発掘作業員作業開始	11月4日	法面作業員作業開始 北西斜面のトレンチ調査
8月5日	立科町主催遺跡見学会・発掘体験を開催	11月10日	法面作業員作業終了
8月6日	尾根頂部土塁状高まり部分のトレンチ調査	11月13日	佐久建現地確認、用地引き渡し 調査終了
9月29日	立科町文化財保護委員、たてしな歴史研究会遺跡見学		

## 第2節 整理作業の経過

### 1. 整理作業の方法

(1) 基礎整理作業

発掘作業年度に、記録類や出土遺物の基礎整理作業として、各種記録類の内容確認や修正を行い、台帳および遺跡・遺構の調査所見を作成。写真類は撮影内容等の点検、台帳作成の後アルバムに収納した。出土遺物は洗浄・注記を行い、種類別に仮収納した。

(2) 本格整理作業

報告書作成に向けた本格整理作業を平成27年度に実施した。出土遺物は分類・接合等を行い、器種や形態が把握できるものを報告書掲載遺物として選択抽出し実測・トレースを行った。図面類は、基礎整理作業の修正図をもとに、必要に応じて2次原図を作成し、デジタルトレースにより図版を作成した。遺物図版もトレース図をパソコンに取り込み版組を行った。

(3) 資料の収納

出土遺物、実測図面、写真などの記録類は、報告書刊行後の保管先変更へ備え、分類収納した。

## 2. 日誌抄

平成27年		7月23日	遺物写真撮影
6月3日	整理作業開始、各種記録・図面類の整理開始	12月17日	印刷・製本業者決定
6月26日	遺物接合・復元、実測作業開始	平成28年	
7月1日	図面類デジタルトレース開始	3月18日	報告書刊行

## 第3章 遺跡の環境と概要

### 第1節 遺跡の地理的・歴史的環境

立科町は長野県の東部、北佐久郡の西部に位置する。八ヶ岳火山列の最北端にある蓼科山の北山麓に広がる町で、南北の長さ26.4km、東西の長さ最大9.9kmという細長い町である。町の地形は大きく南側の蓼科山の噴出物などによる火山性高原地帯と、その北方に広がる蓼科山裾野や八重原台地と呼ばれる平坦な地区とに分けられる。新城峰遺跡は、長和町との境をなして北に延びる蓼科山裾野と八重原台地との境付近に所在する（第4図）。

立科町では遺跡の発掘調査例が少なく、原始から古代・中世にかけての遺跡の状況に関しては詳らかでない部分も多い。過去の調査例をみると、芦田の大庭遺跡で縄文時代前期から中期と奈良・平安時代の集落跡が検出されている。同じく芦田の龍田遺跡では中世芦田氏の菩提寺光徳寺跡の伝承地で寺院跡と考えられる遺構が検出されている。また、蓼科山山麓の雨境峠付近には古墳時代の祭祀跡の遺跡が古道に沿って幾つも存在し、剣形や勾玉・管玉など多彩な遺物が出土している。

中世では、新城峰遺跡の南東900m程の山裾に位置する古刹津金寺には、多くの石造物が残されている。長野県宝に指定されている鎌倉時代の滋野氏宝塔三基の他、数えきれないほどの五輪塔と宝篋印塔がある。

この他、近世中山道の笠取峠の松並木は長野県の天然記念物に指定されている。

新城峰遺跡周辺では、浅い谷を隔てた東側に矢原遺跡(128)が隣接する。縄文時代の石鏃が採集されているが、当宇山バイパス事業に伴う試掘調査では遺構・遺物とも検出されず、遺跡の実態は不明である。また、南側の石川集落内には荒城遺跡(124)があり、中世のカワラケが採集されたとされる。小桶沢川を挟んだ北西側には二反田道下遺跡(163)や、屋敷添遺跡(125)があり、古墳時代から平安時代にかけての土師器などが採集されたとされるが、いずれの遺跡も調査歴がなく、遺跡の詳細は不明である（第5図）。

### 第2節 遺跡概要

#### 1. 遺跡概観

遺跡は、立科町北西部の大字山部字新城峰に所在する。遺跡のある立科町北西部は、更新世前期小諸層群上部の宇山層と呼ばれる古い地層を基盤とするため、浸食による谷地形が発達している。遺跡周辺でも番屋川支流の小河川の浸食によって、平坦地と尾根が組み合わさった地形となっている。

新城峰遺跡西側には、蓼科山から延びる山裾に石川や立石などの集落が立地する平坦地があり、東側から北側にかけては番屋川の形成した平坦地との間に細かい谷に刻まれた尾根地形が広がっている（第5図）。

新城峰遺跡が立地する尾根もこうした尾根の一つで、標高は760～800mを測る。西側から南西側は小桶沢川の深い谷に画された急峻な斜面で、小桶沢川と尾根頂部との比高は約40mとなる。一方、南東から北東側にかけては浅い浸食谷が入り込む緩斜面で、東側の谷との比高は約14mである。

新城峰遺跡は、平成25年度に町教委が実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡で、出土遺物や所在地の字名から中世の山城などに関係する遺跡と想定され、小桶沢川の谷に面した尾根一帯が遺跡範囲として登録されている。



第4図 遺跡の位置



No	名称	所在地	種類	時代	備考	No	名称	所在地	種類	時代	備考
032	西町北屋敷添遺跡	大字芦田字西町北屋敷添	散布地	縄文	芦田遺跡群	124	荒城遺跡	大字宇山字荒城	散布地	中世	
034	上屋敷Ⅰ遺跡	大字芦田字上屋敷	散布地		芦田遺跡群. 035と同一遺跡と考えられる。	125	屋敷添遺跡	大字宇山字屋敷添	散布地		
035	上屋敷Ⅱ遺跡	大字芦田字上屋敷	散布地		芦田遺跡群. 034と同一遺跡と考えられる。	128	矢原遺跡	大字宇山字矢原	散布地	縄文	平成26年2月に範囲変更
036	峠反りⅠ遺跡	大字芦田字峠反り正明寺	散布地		芦田遺跡群.(正明寺遺跡)	159	舟久保古墳	大字芦田字舟久保	古墳		古墳墓
037	峠反りⅡ遺跡	大字芦田字峠反り正明寺	散布地	縄文	芦田遺跡群	160	舟久保遺跡	大字芦田字舟久保	散布地		
038	上石打場遺跡	大字芦田字上石打場	散布地		芦田遺跡群	161	上房遺跡	大字山部字上房	散布地		
039	正明寺古墳	大字芦田字南屋敷添	古墳		芦田遺跡群. 墳丘墓	162	大深山遺跡	大字宇山字大深山	散布地		
040	西山ノ神遺跡	大字芦田字西山の神	散布地	縄文	芦田遺跡群	163	二反田道下遺跡	大字宇山字二反田道下	散布地		
123	極楽坂遺跡	大字芦田字極楽坂	散布地			181	新城峰遺跡	大字山部字新城峰	散布地	中世	

第5図 周辺の地形と遺跡分布

## 2. 調査の概要

今回の調査対象地は、新城峰遺跡の立地する尾根の中央部を縦断するように東西約150m、南北は最も広い尾根頂部付近で約40mの範囲である。調査対象面積は4,664㎡となる。

調査前の現況は、一帯が赤松の山林となっており、調査の開始にあたり樹木の伐採が必要であった。伐採は佐久建が発注し、平成26年度当初より実施する計画であったが、進入・搬出路の確保などの問題により遅れが生じ、6月より実施することとなった。

発掘作業も6月から伐採作業が遺跡へ影響を及ぼさないように現地立会を行いながら、調査準備や尾根頂部で確認された低い土塁状の高まり周辺の精査等を開始した。7月後半、北西急斜面部を除いた調査対象地の大半の伐採が終了したことから、重機による表土剥ぎを開始し、8月上旬から作業員を雇用して遺構検出などに着手した。

当初、中世の山城に関係するのではないかと想定された尾根頂部の平坦部の低い土塁状の高まりは、精査・トレンチ調査の状況や旧地権者への聞き取りなどから、現代の薬用人参耕作に伴う盛土と判明し、中央の平坦部には畝状の跡も確認された。

一方、尾根頂部から東側斜面上部では、中世の竪穴状建物跡や掘立柱建物跡などの遺構が検出され、10月末までに遺構調査を終了し、その間、地元住民向けの現地説明会を開催した。

なお、尾根北西側の急斜面部及び調査範囲西端の小桶沢川に面した低位部については、安全面を考慮し法面掘削作業員による調査とし、11月上旬から中旬にかけて樹木の間をぬって5本のトレンチ調査を実施した。調査の結果、急斜面・低位部では遺構が確認されず、遺物も斜面上部の表土で尾根頂部から流れ込んだと判断される内耳鍋片がわずかに出土したのみであったため、面的調査は不要と判断し、トレンチ調査でこの範囲の調査を終了した。

以上、新城峰遺跡の調査では、当初想定された中世山城に関係する遺構は認められなかったが、尾根頂部から東側斜面で中世後期室町時代の竪穴状建物跡や掘立柱建物跡などで構成される集落跡が検出された(第6図)。

## 3. 基本層序

調査対象地の基本層序は以下のとおりとなる(第6図)。

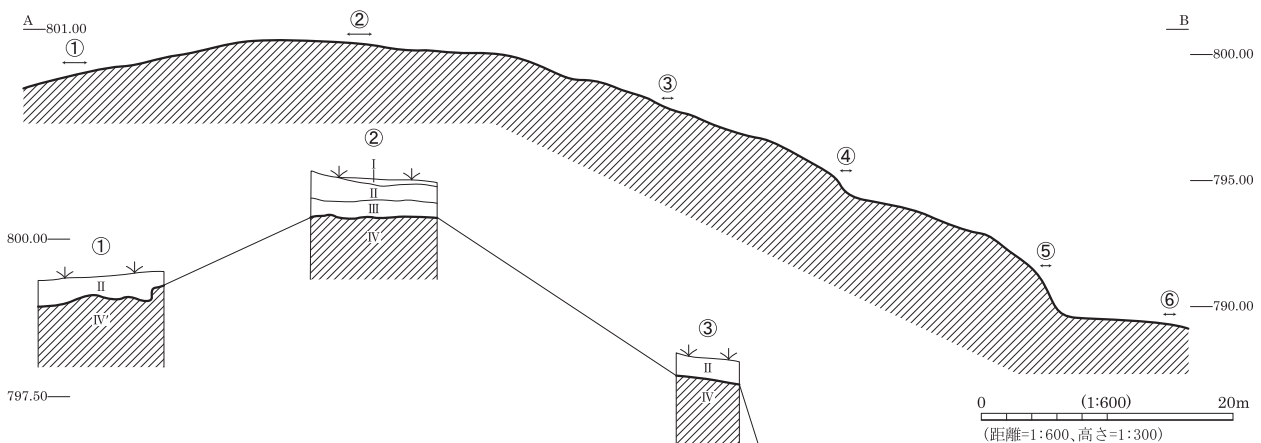
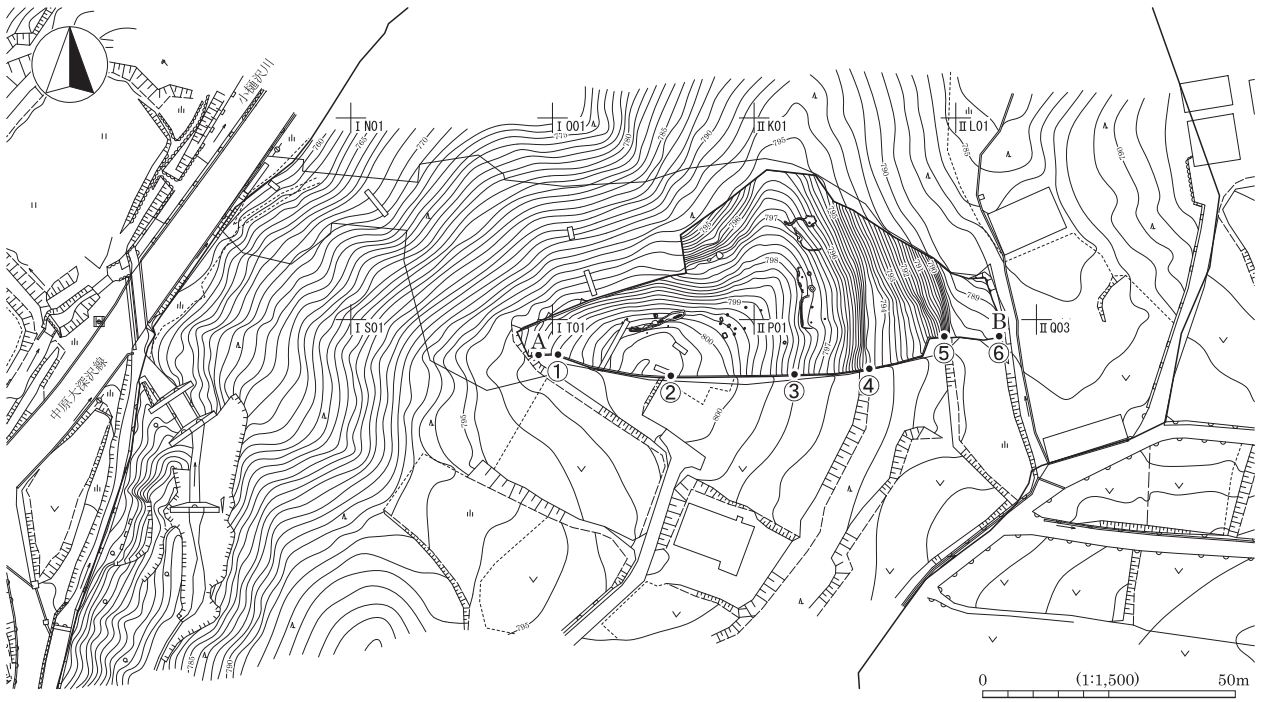
I層：10YR3/2 黒褐色土。表土・腐食土で、薬用人参畑跡の畝の間や根切り溝の上部に認められる。

II層：10YR4/4 褐色土。薬用人参畑の旧耕作土。粘性なく、砂混じりのボソボソしたシルト質土。ビニールや缶・ビンなどが混入している。遺物を含む。

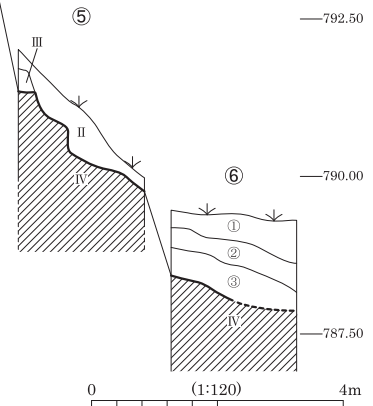
III層：10YR4/6 褐色土。II層に類似し、粘性なく細かい炭化物が少量混じる。尾根頂部の薬用人参畑跡以外ではII層の畑耕作土と識別が難しい。遺物を含む。

IV層：10YR5/6 黄褐色土。地山の土層で、III層より明るく、しまりがあり、粘性がややあり、堅くしまるところもある。炭化物を少量含む。遺構検出面である。

調査では上記のように基本土層を把握したが、I層からIII層は、基本的に地山となるIV層黄褐色土の上に堆積した表土層や旧耕作土である。II層やIII層中には中世の遺物も含まれるが、現代のビニールなども含まれている。旧地権者への聞き取りによると尾根頂部は薬用人参畑、東側斜面一帯もレンギョウなどの花卉栽培用の畑として使用していたとのことである。もともと遺跡は尾根となっているため、土層の堆積は少ないうえに営農によるかく乱や斜面下部への流出などにより本来の遺物包含層は残存していない状況といえる。



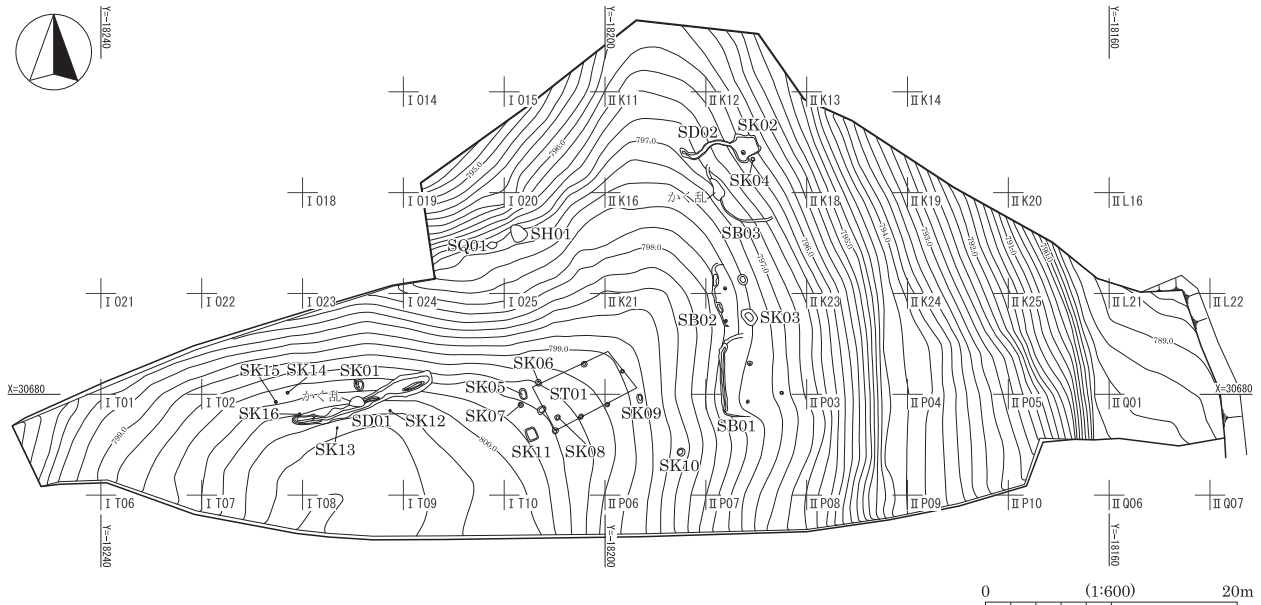
- |                          |   |
|--------------------------|---|
| I 黒褐色 (10YR3/2)          | 耕作土上面に薄く堆積する。表土・腐食土。  |
| II 褐色 (10YR4/4)          | 粘性なし。砂混じりでややホロソする。遺物と共にビニール・缶・ビンなど混。畑耕作土。                     |
| III 褐色 (10YR4/6)         | II層に類似。粘性なし。炭化物細粒少混。遺物混。やや明色。尾根頂部の葉用人参畑跡以外ではII層土と識別が難しい。畑耕作土。 |
| IV 黄褐色 (10YR5/6~5/8)     | 粘性ややあり。しまりあり。堅くしまるところもある。遺構検出面。明色。地山。                         |
| IV' にぶい黄褐色 (10YR4/3~5/4) | 粘性・しまり強。白灰色粘質土混。下部では細かい角礫多混。地山。                               |
| ① 褐色 (10YR4/4)           | しまり強。畑造成土か。表土。  |
| ② 暗褐色 (10YR3/4)          | 粘性なし。しまりあり。旧表土か。  |
| ③ 褐色 (10YR4/4~4/6)       | 砂質土。粘性なし。II~III層に対応するか。                                       |



第6図 遺跡全体図・基本層序

## 第4章 遺構と遺物

調査では、尾根頂部から東側緩斜面の上部で竪穴状建物跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土坑16基、溝跡2条、土器集中・礫集中各1箇所などの遺構が検出された（第7図）。以下、遺構ごとに記載する。



第7図 遺構全体図

### 1. 竪穴状建物跡

竪穴状建物跡は尾根頂部からやや下がった東側斜面で、等高線に沿って並ぶように3軒が検出された。建物跡の東側は急斜面となり下段の狭い平坦部へつながる。

建物跡は斜面上部側を掘り込んで平坦部をつくりだした半地下式の建物跡と考えられ、斜面下部側は削平されて残存していない。長軸は等高線に沿う南北方向となると考えられる。建物内の施設は明確でなく、炉跡はなく、柱穴も不明瞭である。遺構の立地状況からみると竪穴状の掘り込みは斜面上部側の狭い範囲に限られると考えられることから竪穴状建物跡とした。

SB01 [第8・14図 PL 2]

位置：東側斜面のⅡK 22・ⅡP 02グリッド。南北に3軒並ぶ建物跡の中で最も南側に位置する。

検出：遺構検出時に、地山よりやや暗い色調の土層が南北の溝状に広がるのを検出。溝状の部分より東側の斜面下側は地山が露出し、かく乱も広がる。

埋土：斜面上部側の壁際のみ埋土が残る。埋土は地山の黄褐色土よりやや暗いにおい黄褐色土で、炭化物が少量混じる。

構造：建物跡の壁が残るのは西側の斜面上部側のみで、他の辺は削平などのため確認できない。規模は南北6～6.5m程、東西は床面範囲と想定される平坦面の広がりから4～5m程度と思われる。

長軸は等高線に沿うように南北方向を向く。床面は黄褐色土の地山面で貼床などはない。西側壁下に幅30～40cm程の周溝が廻るが、南北の辺には延びていない。建物内に炉跡はない。ピットが西側壁よりやや内側で3基検出され、P 1は位置関係から柱穴の可能性が高いが、P 2・P 3は判然としない。

遺物：周溝内や埋土からは内耳鍋片 10 点、土師質皿片 1 点の小片が出土したのみである。第 14 図 1 は底径 22cm 程の内耳鍋底部片で、胴部は直立気味に立ち上がる。外面は底部付近まで煤が付着する。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。周溝出土炭化物の年代測定結果の 16 世紀前半～末の値とも整合する。

#### SB02 [第 8・14 図 PL 2・5]

位置：東側斜面のⅡ K 17・22 グリッド、3 軒並ぶ建物跡の中で中間に位置する。

検出：遺構検出段階で、SB01 の埋土と類似した土層が不整形に広がるのを確認し、遺物も散見されたことから建物跡と想定した。不整形でプランが判然としない。

埋土：斜面上部側の西側では厚いが東側にいくほど薄くなる。にぶい黄褐色土の砂混じり砂質土。

構造：建物跡の壁が残るのは西側の斜面上部側のみで、他の辺は削平などのため確認できない。規模は西側壁が不明確となる部分がコーナー付近と想定して南北 5m 程、東西は地山面が露出し東側に傾斜するため不明であるが、長方形のプランと思われる。西壁はテラス状に段となる部分がある。長軸は等高線に沿うように南北方向を向くと考えられる。床面は黄褐色土の地山面で貼床などはない。

建物内に炉跡はない。ピットは 2 基検出された。P 1 は径が大きく浅く柱穴とは考えにくい。P 2 は直径 20～25cm、深さ 20cm 程で壁が粘土質の堅い土となっている。

なお、建物範囲内に SK03 がある。直接の切り合い関係は確認できなかったが、SK03 は平安時代の黒色土器片が出土していることから、SB02 が SK03 を切る事となる。

遺物：建物内南西部の床面付近から内耳鍋片 7 点、土師質皿 3 点と銭貨が 1 枚出土した。銭貨は腐食が進み銘は判読できない (PL 5-12)。第 14 図 2 は底径 24cm 程の内耳鍋底部片で、比較的薄手となる。3 の土師質皿は、口径 9cm 程度の小形で、ロクロ成形されやや厚手である。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。なお、P 3 出土の炭化物の年代測定は 7 世紀中頃～末の年代が得られ、遺構出土遺物と時期が合わないことから、P 3 は SB02 に伴うものではないのかもしれない。

#### SB03 [第 8・14・16 図 PL 2]

位置：東斜面のⅡ K 12・17 グリッド、3 軒並ぶ建物跡の中で最も北側に位置する。

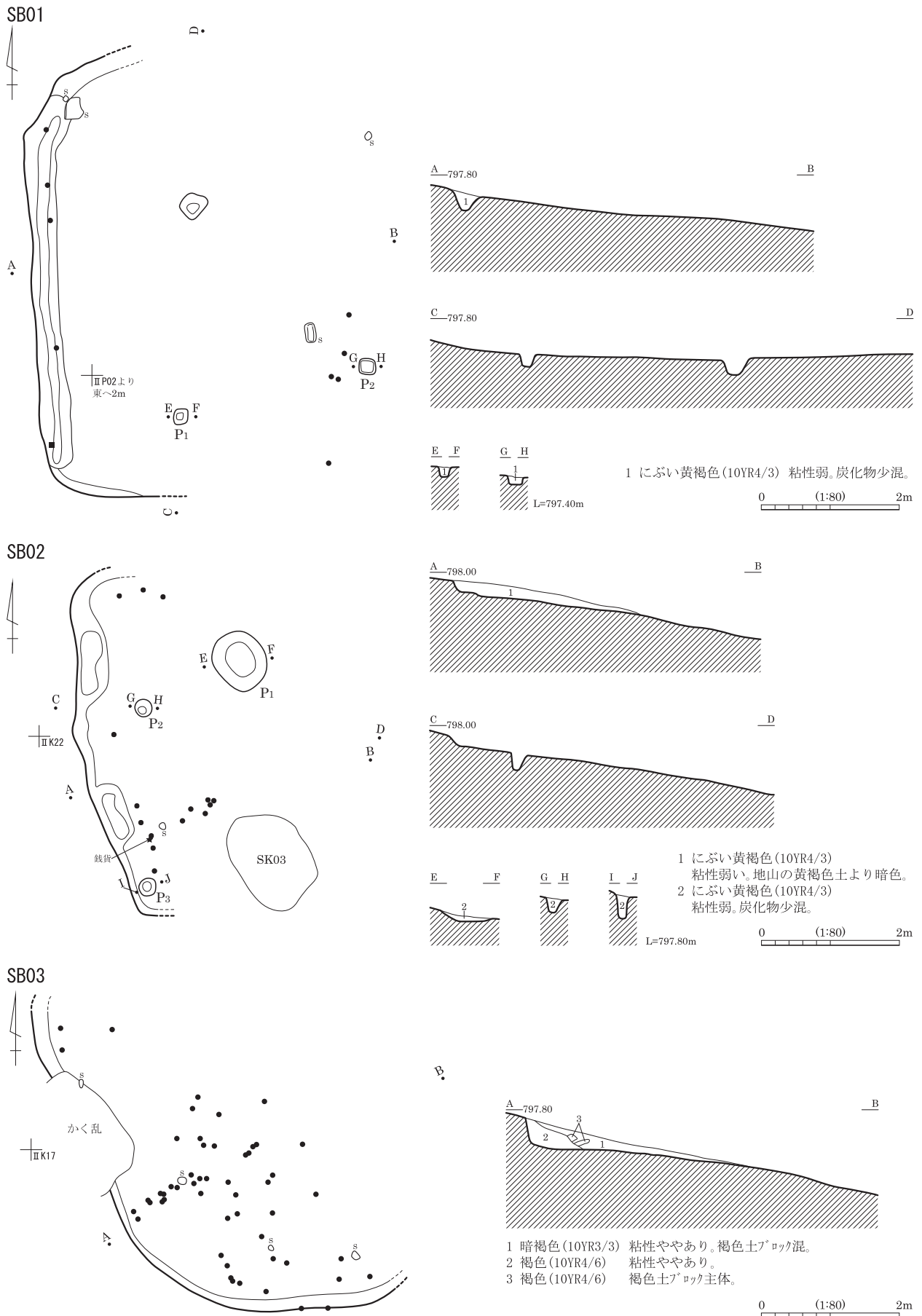
検出：遺構検出作業で、地山の黄褐色土面に暗褐色土の広がりとして検出。検出面で遺物も散見されたことから建物跡と想定した。斜面上部の西側中央部には松の根があり、東側は斜面の傾斜のため削平されプランは不明確であった。

埋土：2 層に分層され、上部は他の建物跡の埋土に類似する暗褐色土となる。西側の壁際には地山に類似した褐色土が堆積し、壁の崩落土の可能性が考えられる。

構造：建物跡の壁が検出できたのは西側の斜面上部側のみである。規模は南北 5m 程と想定されるが、東西は比較的平坦となる 3～4m 程度か。形状は南西部が丸みを帯びるが SB01 などと同様に長方形を呈するものと考えられる。検出された西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も深いところで 50cm 程を測る。床面は地山の黄褐色土面で東側に向かって傾斜するが、建物外と考えられる傾斜面より傾斜が緩い。建物内に炉跡はなく、ピットも検出されなかった。

遺物：建物内南西部の埋土中から中世の土器類がややまとまって出土した。内訳は内耳鍋 56 点、鉢 1 点で土師質皿は含まれない。石器は磨石が 2 点出土している。

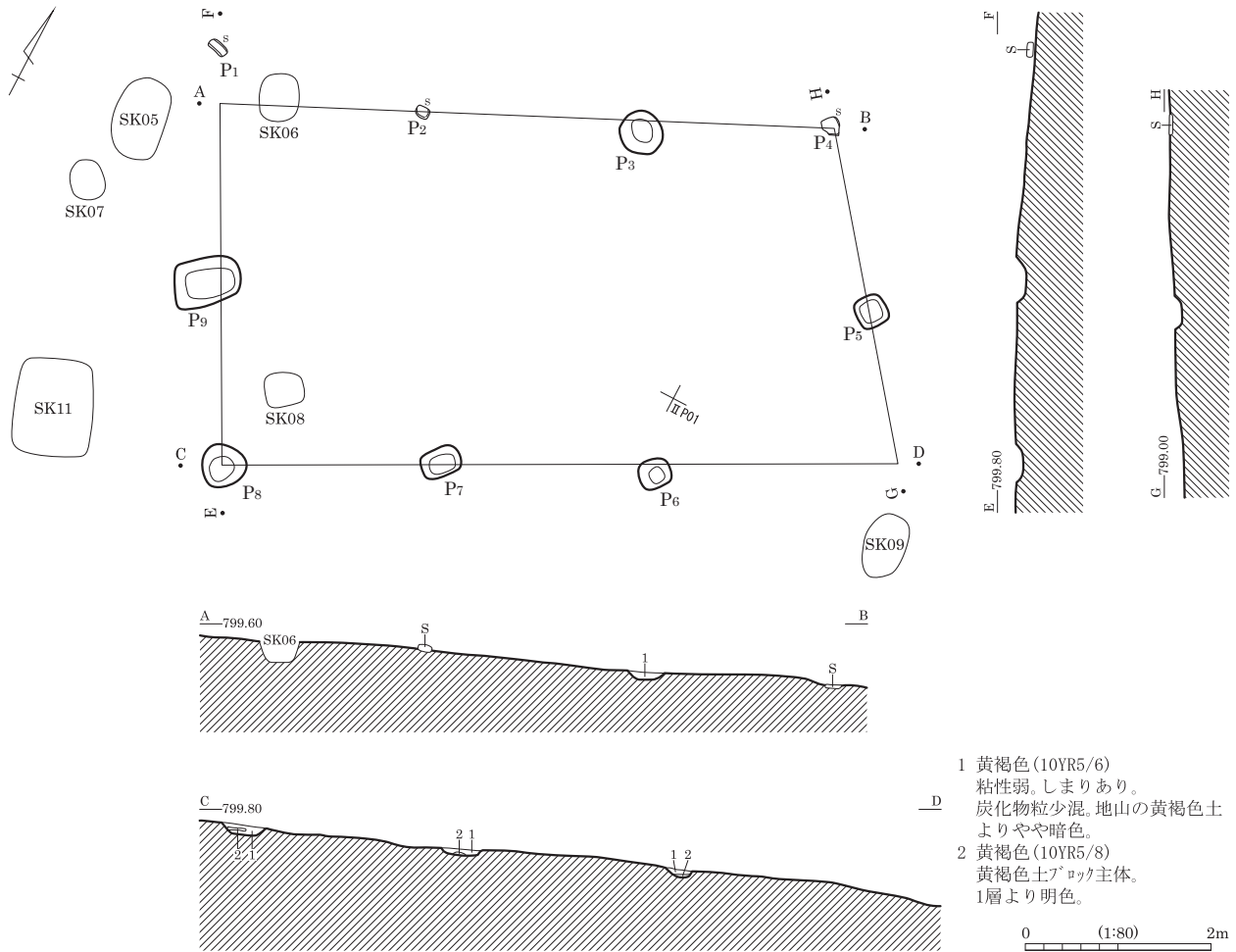
第 14 図 4・5 の内耳鍋口縁部は直立気味に立ち上がる。4 は環状の耳が付く。6 の鉢は厚手の底部から大きく開く。内外面とも部分的に煤の付着がみられる。第 16 図 8 は輝石安山岩の長方体の礫を素材とし、



第8図 竪穴状建物跡



ST01



第9図 掘立柱建物跡

平坦な二面が磨れている。9は深成岩の扁平礫を素材とし、平坦な広い面が磨れている。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

## 2. 掘立柱建物跡

尾根頂部付近の東側斜面で一棟を検出。竪穴状建物跡より8m程斜面上部の西側に位置する。

ST01 [第9・14図 PL2]

位置：尾根頂部から東側斜面にかかるIO25、IT05、IK21、IP01グリッド。

検出：遺構検出時に地山の黄褐色土上面で平坦な礫が2個確認され、付近でやや浮いた状態でさらに1個の礫が確認された。このことから礫を伴う掘立柱建物跡を想定し周囲の精査を繰り返したところ、柱穴になると推測される落ち込みが確認され掘立柱建物跡と判断した。

構造：尾根の傾斜に合うように主軸が南西—北東を向く2間×3間の建物跡で、桁行約7m、梁行約3.5～4mの規模となる。

柱穴は桁行北側列では3間4本の内3箇所は掘り込みがなく、P1・P2・P4は礫を据えたものとなっている。礫は直径10～20cm程度で上面が平坦となっている。北西隅の礫(P1)は柱穴想定位置からはずれ、遺構検出面の黄褐色土よりやや浮いて出土したが、動いてずれたものと判断した。これら礫は礎板石として据えた可能性がある。途中のP3は、直径40cm、深さ10cm程度の柱穴となる。

桁行南列の柱穴は直径40cm、深さ10cm程度でやや方形気味となる（P6～P8）。南東隅の柱穴は検出面が削平により下がっていて検出できなかった。

梁行の柱穴も桁行南列と同様で、方形気味で深さ10cm程の掘り込みとなっている。

柱間は桁行で2～2.4m、梁行で2m程を測る。掘立柱建物跡の範囲内には炉や他の施設などは確認されず、建物内の床面も周囲と同じ地山の黄褐色土で硬化面などは認められなかった。

遺物：P9の柱穴から内耳鍋小片が2点出土したのみである。第14図8は内耳鍋底部片で、外面は底部付近まで煤が付着する。

時期：調査状況・出土遺物から中世後期室町時代。

### 3. 土坑

土坑は16基検出された。分布状況は、尾根頂部の溝跡SD01の周辺に小形のピット状の土坑が5基近接してある。また、東側斜面上部の掘立柱建物跡周辺には円形や方形のものがややまとまっている。他には、斜面を下った竪穴状建物跡の周囲にも幾つか散漫に分布する。大半が遺物を伴わないが、他の遺構の状況や出土遺物から中世のものがほとんどと考えられる。以下、個別に記載する。

#### SK01 [第10・14図 PL2]

位置：尾根頂部北側のI O 23グリッドで、SD01の北側に位置する。

形状・構造：長径100cm、短径75cmの不整円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは10～15cm程度。埋土は上部がにぶい黄褐色土で下部が黄褐色土となる。埋土中から内耳鍋片と土師質皿小片が出土した。第14図7は、直立する内耳鍋口縁部で、口縁端近くでやや内彎する。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

#### SK02 [第10・16図 PL2]

位置：東側斜面北側のII K 12グリッドで、SB03の北東側に位置する。西側のSD02との切り合い関係は不明。

形状・構造：一辺200cm程の不整方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは5～20cm程度。埋土は褐色土が主体で、壁際は黄褐色土となる。埋土中から第16図16の黒曜石製の楔形石器が1点出土した。

時期：出土石器は縄文時代と考えられるが、土坑は他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

#### SK03 [第10・14図 PL3]

位置：東側斜面のII K 22グリッドで、SB02の範囲内東側に位置する。

形状・構造：長径150cm、短径100cmの不整円形を呈する。断面は鍋状で、検出面からの深さは15～30cm程度。埋土は粘性のない黒褐色土で、10cm大程の褐色土ブロックが入り、炭化物を含む。埋土から第14図9の平安時代黒色土器坏片が出土。口径16cm程で、内面が黒色処理されている。

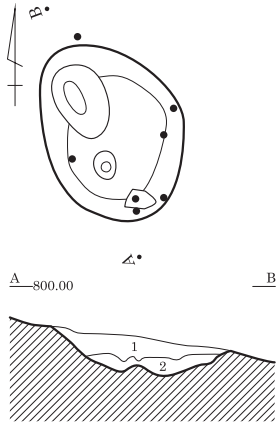
時期：出土遺物から平安時代。

#### SK04 [第10図]

位置：東側斜面北側のII K 12グリッドで、SK02の南側に隣接する。

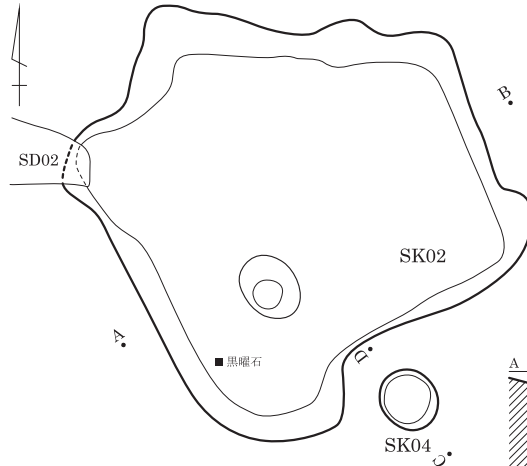
形状・構造：直径30cm程の円形を呈し、検出面からの深さは10cm程度と浅い。埋土はにぶい黄褐色土で、遺物は出土していない。

SK01



1 にぶい黄褐色(10YR4/3)  
粘性弱。しまりあり。  
2 黄褐色(10YR5/6)  
粘性ややあり。

SK02-04

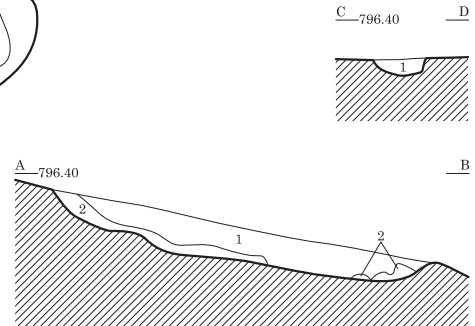


SK02

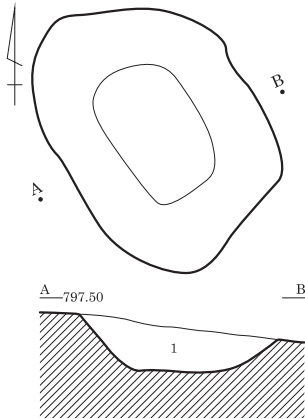
1 褐色(10YR4/4) 粘性ややあり。  
2 黄褐色(10YR5/6) 粘性あり。

SK04

1 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性弱。しまりあり。

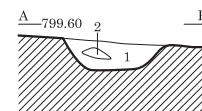
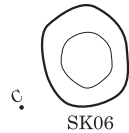
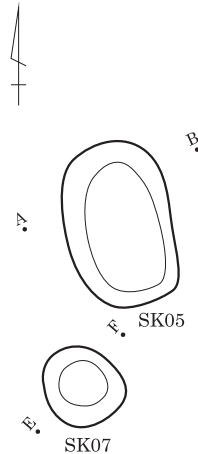


SK03



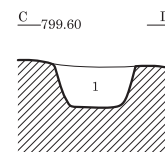
1 黒褐色(10YR2/3)  
粘性弱。炭化物・褐色土ブロック混。

SK05-06-07



SK05

1 黄褐色(10YR5/6)  
粘性弱。しまりあり。  
焼土粒・炭化物少混。  
2 黄褐色(10YR5/8)  
黄褐色土ブロック主体。

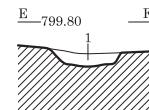


SK06

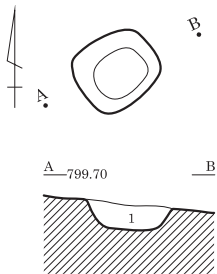
1 褐色(10YR4/4)  
粘性・しまりあり。  
2mm焼土粒少混。

SK07

1 黄褐色(10YR5/6)  
粘性ややあり。  
しまりあり。  
炭化物少混。

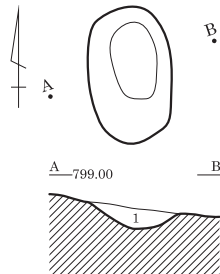


SK08



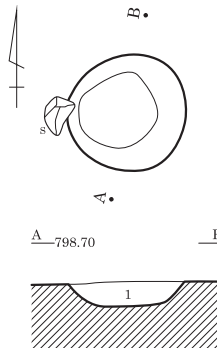
1 黄褐色(10YR5/6)  
粘性ややあり。しまりあり。  
炭化物微混。

SK09



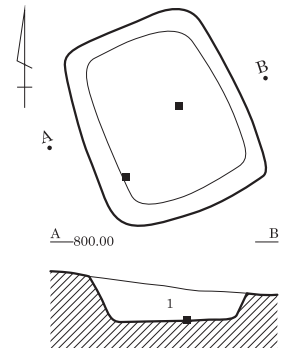
1 黄褐色(10YR5/8)  
粘性ややあり。しまりあり。

SK10

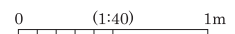


1 灰黄褐色(10YR4/2)  
粘性ややあり。黄褐色土ブロック・  
炭化物少混。

SK11



1 褐色(10YR4/6)  
粘性ややあり。しまり弱。  
炭化物微混。



第10図 土坑

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

#### SK05 [第10図]

位置：東側斜面上部の I O 25・I T 05 グリッド。ST01 の北西隅に位置する。

形状・構造：長径 90cm、短径 55cm の隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 10cm 程。埋土は黄褐色土で、埋土中から土師質皿小片が 1 点出土。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

#### SK06 [第10図]

位置：東側斜面上部の I O 25 グリッド。ST01 の北西隅付近で、SK05 の東側に位置する。

形状・構造：長径 50cm、短径 40cm の円形を呈する。断面形は鍋状で、検出面からの深さは 20cm 程度。埋土は焼土粒が混じる褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

#### SK07 [第10図]

位置：東側斜面上部の I T 05 グリッド。ST01 の北西隅付近で、SK05 の南西に位置する。

形状・構造：直径 40～45cm の円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 10cm 程と浅い。埋土は炭化物を少量含む黄褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

#### SK08 [第10図]

位置：東側斜面上部の I T 05 グリッドで、ST01 の南西隅付近に位置する。

形状・構造：長径 45cm、短径 40cm の隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 10～15cm 程度。埋土は SK07 に類似した黄褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

#### SK09 [第10図]

位置：東側斜面の II P 01 グリッドで、ST01 の南東隅付近に位置する。

形状・構造：長径 70cm、短径 45cm の隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 5～15cm と浅い。埋土は黄褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

#### SK10 [第10図 PL 3]

位置：東側斜面中程の II P 01 グリッド。

形状・構造：直径 60cm の円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 5～10cm と浅い。埋土は炭化物を少量含む灰黄褐色土。埋土中からは遺物の出土はないが、土坑の縁にかかるように直径 15cm 程の礫がみられた。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK11 [第10・16図 PL 3・5]

位置：東側斜面上部の I T 05 グリッドで、ST01 の西側に位置する。

形状・構造：長辺 105cm、短辺 85cm の方形を呈する。断面形は鍋状で、壁が直線的に立ち上がる。検出面からの深さは 20cm 程度。埋土は炭化物を微量含む褐色土で、埋土中から土師質皿小片 1 点と磨石 1 点、底面直上から砥石 1 点が出土した。第 16 図 4 は凝灰岩製の砥石で、全周面を砥面として使用している。上下両端が細くなり、砥面は平坦となる面とすり減って彎曲する面もある。10 は磨石・敲石で輝石安山岩の円棒状礫を素材とし、両面が磨れている。両端には敲打痕がわずかにみられる。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

SK12 [第11図]

位置：尾根頂部の I T 03 グリッドで、SD01 の南側に位置する。

形状・構造：直径 20～25cm 程の円形を呈し、検出面からの深さが 35cm 程と深い。埋土はややボソボソした褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK13 [第11・16図 PL 3・5]

位置：尾根頂部の I T 03 グリッド。SD01 の南側で SK12 の西側に位置する。

形状・構造：長径 20cm、短径 10cm の楕円形を呈し、検出面からの深さが 30cm 程と深い。埋土は SK12 と同様で、埋土上部から第 16 図 7 の小形の凹石 1 点が出土した。輝石安山岩製で、直径 6cm 程と小形で中央部が大きく 5mm 程くぼんでいる。

時期：土器の出土はないが、中世後期のものと推測される。

SK14 [第11図]

位置：尾根頂部北側の I O 22 グリッドで、SD01 の北側に位置する。

形状・構造：一辺 20cm 程の方形を呈し、検出面からの深さが 35cm 程と深い。埋土は SK12 と同様で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK15 [第11図]

位置：尾根頂部北側の I O 22 グリッド。SD01 の北側に位置し、SK14 と 1m 程に近接する。

形状・構造：一辺 20cm 程の方形を呈し、検出面からの深さが 30cm 程と深い。埋土は SK12 と同様で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK16 [第11図]

位置：尾根頂部北側の I T 02 グリッド。SD01 の北側に位置し、SK14・15 とは 2m 程に近接する。

形状・構造：一辺 20cm 程の方形を呈し、検出面からの深さが 30cm 弱と深い。埋土は SK12 と同様で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

## 4. 溝跡

SD01 [第11・14図 PL 3・5]

位置：尾根頂部北側斜面のIT 02・03、IO 23・24グリッドに位置する。

形状・構造：尾根頂部の平坦部から斜面にかかる地点で、斜面に沿うように東西に延びる。長さ約12m、幅1～1.5mで、部分的にテラス状の段差がみられる。立ち上がりは緩やかで、斜面上部の南側では20～30cm弱の掘り込みをもつが、斜面下部の北側では立ち上がりが不明瞭となる。埋土は地山の黄褐色土よりやや暗い褐色土でやや砂質となる。

本溝跡については、斜面を掘り下げ平坦部をつくった竪穴状建物跡の可能性も考慮したが、長さが長いこと、溝北側斜面の傾斜がきつく、建物跡床面の平坦部が確保できないことなどから溝跡と判断した。

遺物：埋土中および溝北側の斜面からは内耳鍋片61点、鉢1点、土師質皿19点が出土した。他の遺構に比べ土師質皿の出土数が多いが、破片が小片のため同一個体の確認が難しいことも一因と思われる。第14図10・11・13は内耳鍋の口縁部および胴部片で、直立気味に立ち上がり口縁部は薄手となる。外面には多量の煤の付着が認められる。土師質皿は口径が10cmを超えるやや大形の14・15と、9cm以下の小形の16～18がある。いずれもロクロ成形で底部には糸切り痕が残る。12は鉢の口縁部で、口縁が大きく開く器形で、口唇部は平坦となる。内耳鍋に似た胎土となる。

時期：出土遺物から、中世後期室町時代。

SD02 [第11図 PL 3]

位置：東側斜面北側のII K 11・12グリッドに位置する。SB03の北側で、SK02と重なるが切り合い関係は不明。

形状・構造：長さ約2.5m、幅30cm程の蛇行する溝で、西半部は松の根のかく乱の可能性がある。検出面からの深さ10～15cmで、埋土は地山に類似する褐色土。遺物の出土はない。

時期：出土遺物はないが、周囲の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

## 5. 土器集中

SQ01 [第11・14・15図 PL 3・5]

位置：IO 19グリッドに位置し、北に延びた尾根斜面が急斜面となる傾斜変換点の急斜面側にあたる。

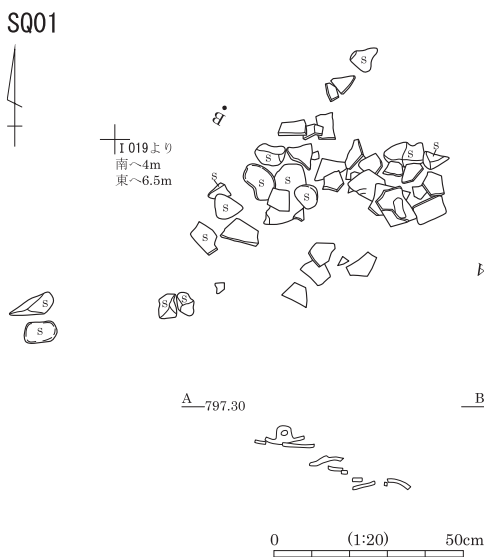
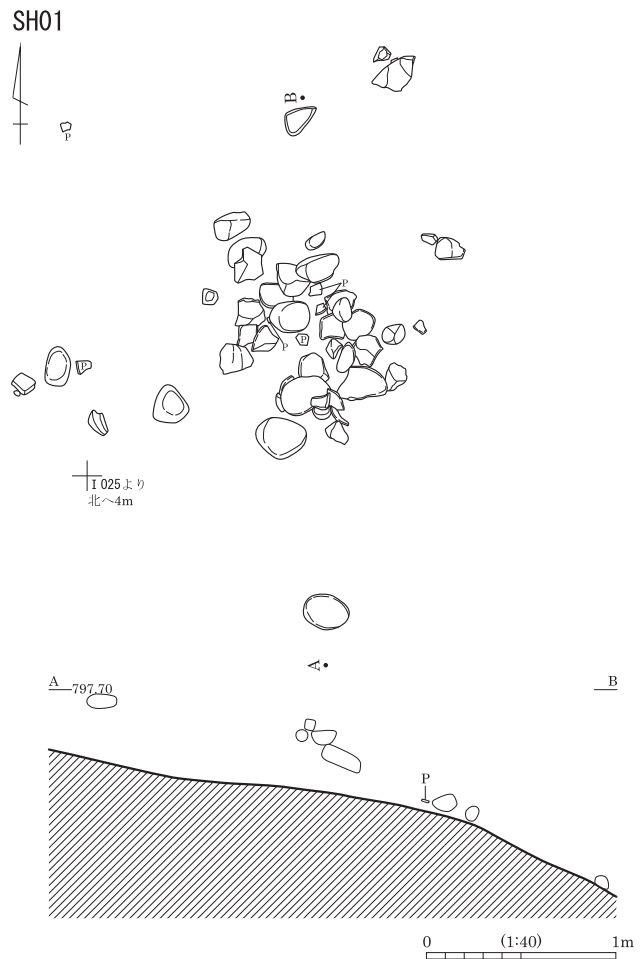
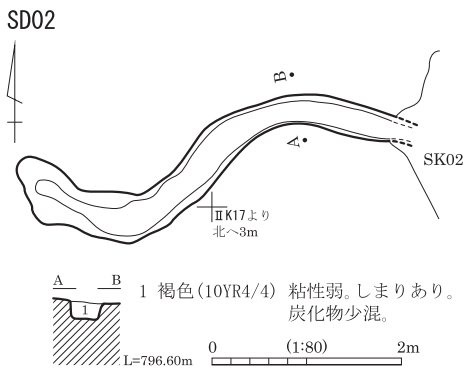
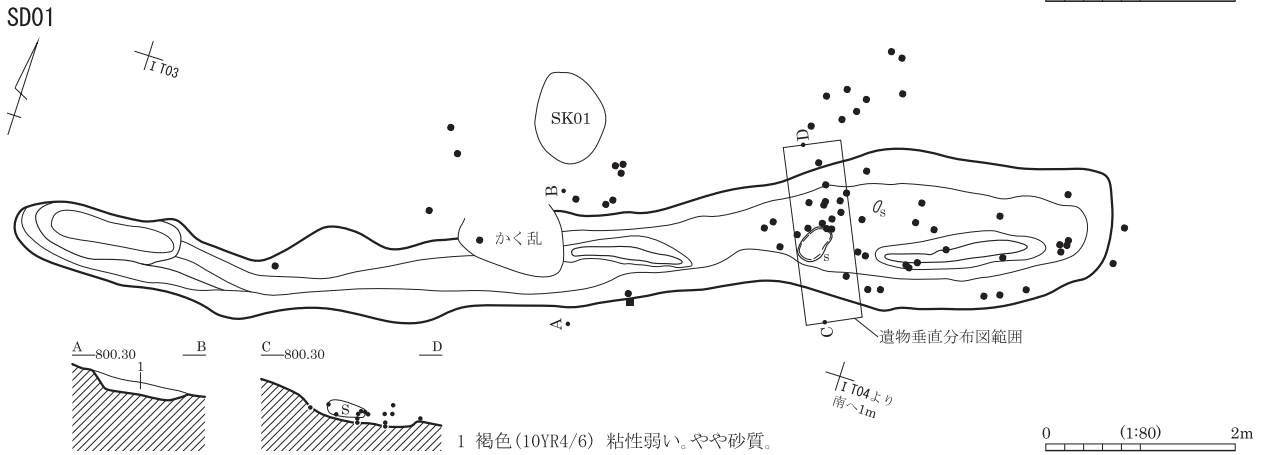
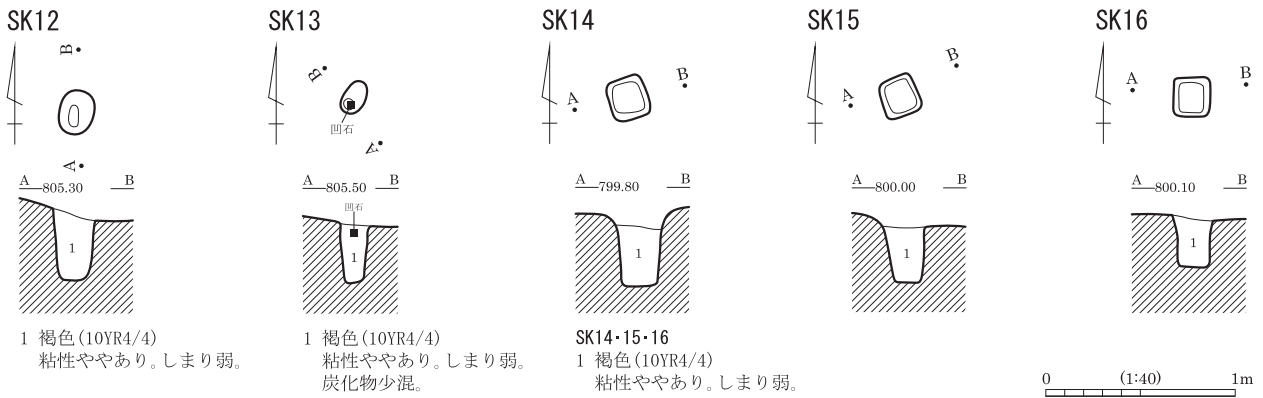
形状・構造：調査着手時の踏査の段階で、急斜面の最上部で地表面に内耳鍋片が散見されたことから精査したところ内耳鍋片がまとまっていることから土器集中として登録した。

内耳鍋片は60×40cm程の範囲にまとまり、地形の傾斜に沿うように表土層上部から出土し、一部は地表面に露出した状況であった。遺物の下部に掘込みは確認されなかった。

遺物：内耳鍋片のみ34点が出土し、一部を除き接合関係があり、概ね5個体分となった。なお、東側に位置する礫集中(SH01)出土のものとも接合関係が認められた。

第14図19は全体の器形がわかる数少ない資料で、口径31cm、器高17cmを測る。薄い底部から直立ぎみに立ち上がり、口縁部との境でやや括れ、口縁部は直立する。口唇部は薄手で平坦になる。外面には煤が付着する。20も同様な器形となる。第15図21・23は環状の耳が付く破片で、22は底部片で、胴部は直立する。

時期：出土遺物は中世後期室町時代のみであるが、地表面に露出した出土状況などを考慮すると、中世以降の畑耕作などに伴い出土した遺物を斜面に廃棄したものかもしれない。



第11図 土坑・溝跡・土器集中・礫集中

## 6. 礫集中

SH01 [第11・15・16図 PL 3・5]

位置：I O 20 グリッドに位置し、SQ01と同様に北に延びた尾根斜面が急斜面となる傾斜変換点の急斜面側にあたる。SQ01は西側1～1.5mにあり、SH01とほぼ同一レベルになる。

形状・構造：SQ01同様に調査着手時の踏査で、地表面に礫が露出し、そばから中世内耳鍋片などが出土していた。精査したところ礫がまとまっていることが判明したことから礫集中として登録した。

礫は120×80cm程の範囲に集中し、周辺にも散漫に分布する。礫の大きさは20～30cm大程度で、円礫と割礫があり円礫がやや多い。斜面の傾斜に沿うように礫は出土し、下部に掘り込みはなく表土上部から地表面に露出した状況である。礫の間から内耳鍋片5点と播鉢1点出土し、内耳鍋片はすべてSQ01の内耳鍋片と接合した。礫の中には石鉢1点と磨石や台石が4点含まれる。

第15図24は播鉢の口縁部で、口縁直下の内面に縦・横方向の卸目が付けられる。胎土は内耳鍋に類似する。第16図1は多孔質の輝石安山岩を用いた石鉢片で、内側が大きく凹む。11は輝石安山岩の扁平円礫を素材とし、平坦な両面が磨れている。特に上面中央部は顕著に摩耗している。12も輝石安山岩の扁平状の円礫を素材とし、平坦となる面が磨れている。14・15は台石と考えられるもので、長径20～25cm程の輝石安山岩の大形礫を素材とし、比較的平坦となる面がわずかに磨れている。

時期：出土遺物は中世後期室町時代のみであるが、出土状況やSQ01との土器の接合状況を考慮するとSQ01同様に後世の畑耕作などで不要な礫や土器を廃棄したものかもしれない。

## 7. その他

薬用人参畑跡 [第12図 PL 4]

位置：尾根頂部のI S 05、I O 21・22、I T 01～04グリッドに広がる。町教委の試掘調査で低い盛土の高まりが確認され（試掘8T）、山城に係する土塁ではないかと想定された範囲にあたる。

形状・構造：一帯は尾根頂部の平坦部にあたり、現状では幅1～2m、高さ20cm程の高まりが東側から北側にかけて確認された。伐採・立木の搬出後、高まりおよびその内部を落ち葉や枯れ枝などを取り除き、地表面の観察ができるように精査を行ったところ、低い高まりは平坦部の縁を囲むように東側・北側・西側の三方向にあり、内部には畝状の筋が10条ほど確認された。現状の地形測量や地表面観察の後、盛土部及びその内部にかけてトレンチを掘削し、遺構や遺物の状況を確認した。

周囲を囲む盛土は、幅1.5m、高さは10～20cm程度である。土層はボソボソした褐色土で、内耳鍋や近世以降の瓦片などを含み、ビニールなども混入している。

盛土内部でも畝状の凹凸が確認されるのみで、遺構は確認されなかった。畝状の凹凸の土層も盛土と同一で、盛土と畝は同時に形成されたものと考えられた。

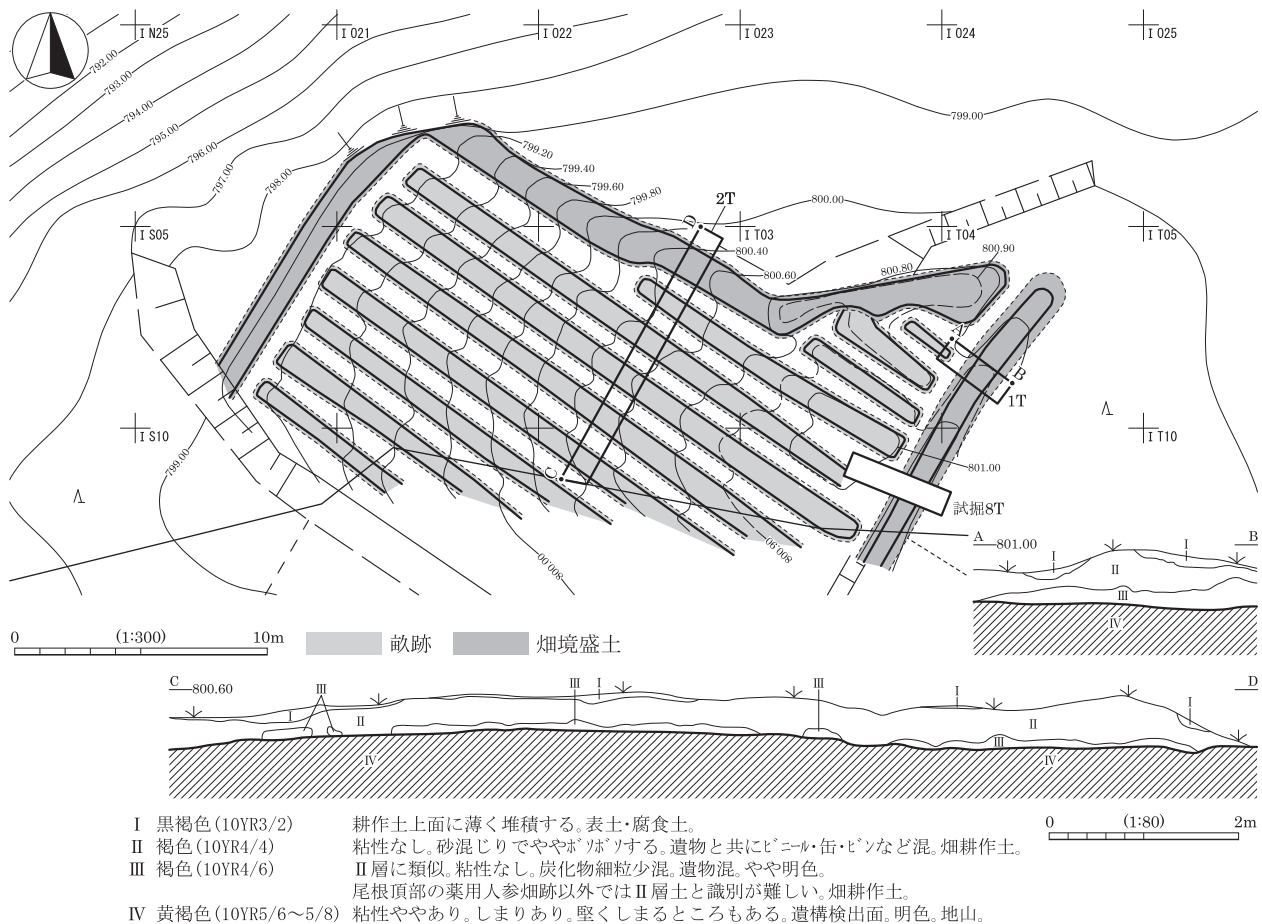
調査状況をふまえ、旧地権者に以前の状況を聞き取りしたところ、この場所は昭和40～50年頃まで薬用人参の栽培を行っていて、現在盛土内に確認される畝状のものはその時の名残であること。また畑境には周囲からの根の進入を防ぐため根切りの溝を掘り外側に盛ったとのことであった。

以上の聞き取り結果およびトレンチでの土層確認などから、尾根頂部の平坦部にみられた高まりは現代の薬用人参の栽培跡で、山城などの遺構に伴う土塁ではないと判断した。

また、畑跡の範囲ではその後、重機による表土剥ぎを行い黄褐色の遺構検出面で遺構検出を行ったが、竪穴状建物跡などの遺構は検出されなかった。

時期：調査所見および旧地権者への聞き取りから現代の畑跡と判断した。





第12図 薬用人参畑跡

西側斜面のトレンチ調査 [第13図 PL 4]

面的調査を実施した東側斜面から尾根頂部より西側で、急斜面となる尾根西側斜面にあたる。谷底には小桶沢川が北流し、尾根頂部とは約40mの比高差がある。西側斜面の状況確認では、数箇所やや平坦部があるように見えるが、実際その場所に立つと傾斜が緩いだけで平坦部とはなっていない状況である。遺物は面調査範囲直下の斜面上部で内耳土器片が数点採集されたのみで、平坦部にみえる部分や斜面下部側では遺物は認められない。

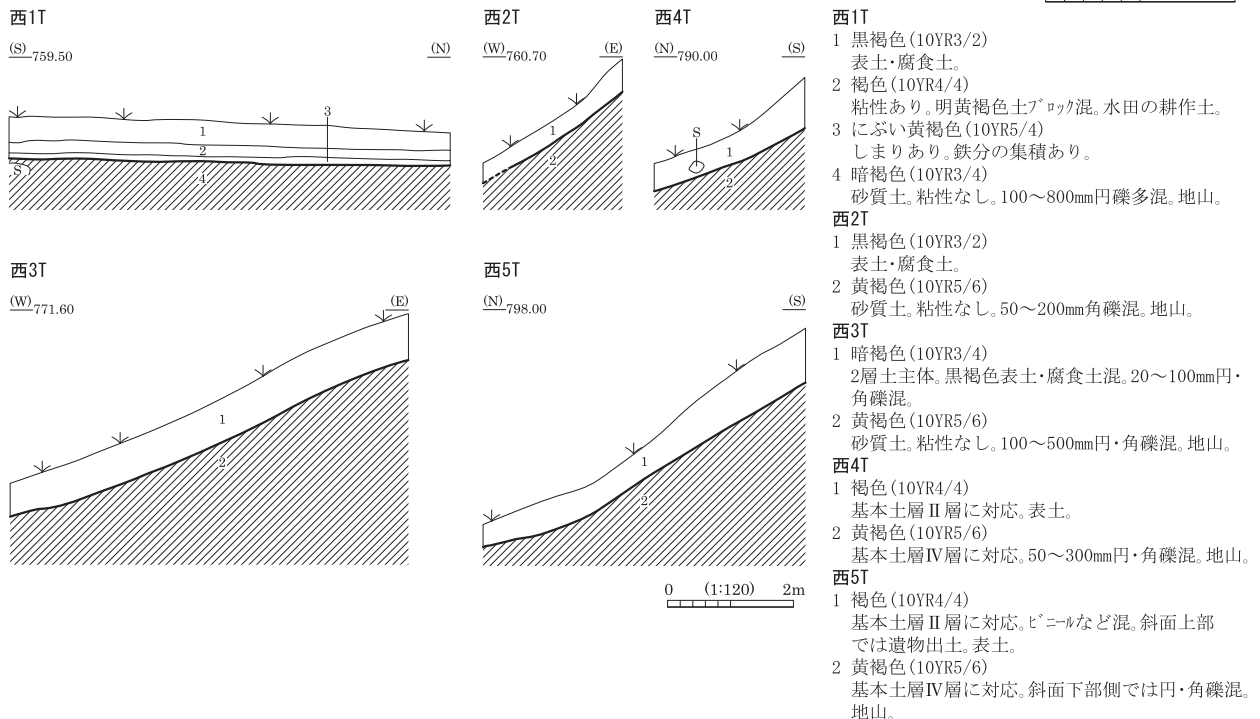
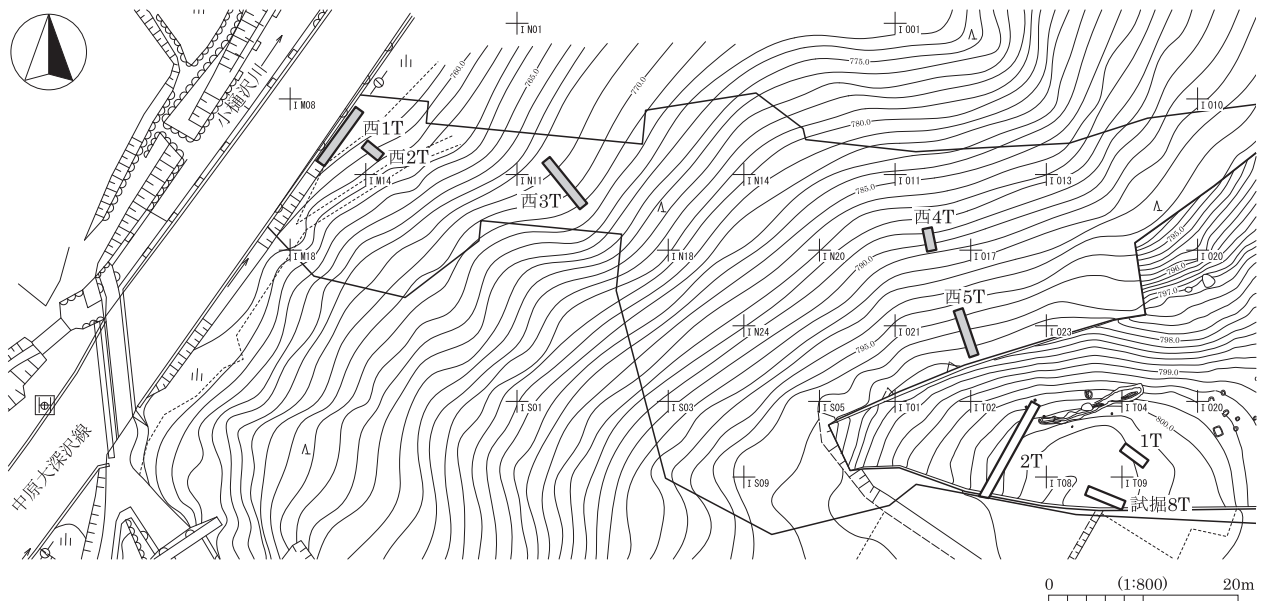
調査は、この西側斜面および西側低位部にかけて5本のトレンチを設定して、遺構・遺物の確認を行った。トレンチは立木の間に設定し、掘り下げは法面掘削作業員によって実施した。

1 T：調査範囲西端の町道中原深沢線に沿った低位部で、I M 08グリッドにあたる。町道の西側には小桶沢川が北流する。トレンチは町道に沿うように長さ7m、幅1mの南北トレンチ。

土層の堆積は地表面から表土(1層)が40cm弱、褐色の水田耕作土(2層)が20cm程、水田下で鉄分が集積したにぶい黄褐色土(3層)が10cm程、地山の暗褐色土(4層)となっている。遺物は出土せず、遺構も確認されなかった。地山には10~80cm大の円礫を多く含む。

2 T：1 Tの東側で低位部から斜面にかかる場所で、I M 09グリッドにあたる。長さ2m、幅1mの東西トレンチ。

土層は表土(1層)が40cm程堆積するのみで地山の黄褐色土となる。地山面は現況の地形の地形に沿って傾斜している。地山には5~20cm大の礫を含むが大形礫の混入は認められない。遺構・遺物ともなし。



第13図 西斜面トレンチ

3 T : 北西急斜面の下部でやや平坦になった場所で、I N 06・11 グリッドにあたる。周囲に比べると傾斜が緩くなっているが平坦ではない。斜面が谷状に窪んだような地形ではないと思われる。長さ6.3m、幅1mの南東—北西トレンチ。

土層は2 Tと同様で、表土(1層)が60～70cm堆積するのみで地山の黄褐色土となる。地山面は現況の地形に沿って傾斜していて、削平などによる平坦部の造成は認められない。地山には10～50cm大の礫を多く含む。礫は円礫と角礫の両方がある。遺構・遺物ともなし。

4 T : 北西急斜面の中程で、周辺に比べやや平坦に見える場所で、I O 11 グリッドにあたる。尾根頂部からみるとやや平坦に見えるが、現地に立つと平坦ではなくやや傾斜が緩くなった斜面となっている。長さ2.3m、幅1mの南北トレンチ。

土層は3 Tなどと同じで、表土(1層)が50～80cm堆積するのみで地山の黄褐色土となる。地山面は

現況の地形に沿って傾斜しており、削平などによる平坦部の造成は認められない。地山には5～30cm大の礫を含む。遺構・遺物ともなし。

5 T：面的調査を行った尾根頂部直下の急斜面部最上部でI O 22グリッドにあたる。斜面上部の尾根頂部からみると、調査地は急斜面であるが、トレンチ北端部付近ではやや傾斜が緩くなっていて平坦部がつくられているように見える。但し、現地立つと幅1m長さ4～5m程の範囲で傾斜が緩くなっているだけで、平坦部にはなっていない。長さ5.1m、幅1mの南北トレンチ。

土層は北側の4 Tと類似し、表土（1層）が30～80cm堆積するのみで直下が地山の黄褐色土となる。地山面はやや平坦にみえたトレンチ北端部を含め、現況の地形に沿った急斜面となっていて、削平などによる平坦部の造成は認められない。地山には5～30cm大程の礫を含む。トレンチ南端の現地表面直下から少量の内耳鍋片が出土したが、斜面上部から流れ込みか、畑耕作時の廃棄と思われる。遺構なし。

以上、5本のトレンチ調査の結果、遺構は確認されず、遺物も斜面上部からの流れ込みと思われる土器が5 Tで少量出土したのみであった。このことから、西側斜面から西側低位部には遺構は存在せず、遺物包含層も認められないものと判断され、トレンチ調査のみで調査終了とした。

## 8. 遺構外 [第15・16図 PL 5]

遺構外から出土した遺物もほとんどが中世の遺物であるが、1点縄文時代の石鏃がある。

第15図25～29・31は内耳鍋。25は口径26cm、器高17cmで、胴部は薄手の底部から直立ぎみに立ち上がり、口縁部との境でやや括れ、口縁部は直立する。26・28・31の口縁部も同様な器形を呈する。27は環状の耳が付く。29は口縁部が外反する器形となる。25・26は外面に煤が多量に付着する。

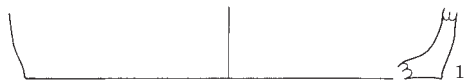
30・32は鉢。32は、口径28cm、器高12cmで、底部から直線的に大きく開く。厚手のつくりで、胎土は内耳鍋に類似する。内面には煤が付着するが、外面には認められない。30も同様な器形で、底部・胴部とも厚手で器厚は1cm以上となる。内・外の底面には煤が付着し、特に外面底部は多量に付着する。34・35は土師質皿で、34は口径10.8cm、器高2.5cm、底部から口縁部に向かい大きく開く。底部には糸切り痕がみられる。35はやや小形で口径8.8cm、器高2.1cmとなる。

33は新城峰遺跡で数少ない陶器で、大窯の稜皿。直径9.4cm、器高2.2cm。内外面に黒色の鉄釉がかかる。内・外の底面には重ね焼きの跡がみられる。これ以外に青磁鎚蓮弁の碗小片が2点出土している。

第16図2・3は石鉢で、いずれも多孔質の輝石安山岩製。2は片口が付き、内面が磨れている。3は口縁端が平坦となる破片。6は凝灰岩製の砥石。長軸8cm程の小形品で、全周面を砥面として使用し、砥面が湾曲する面もある。

17は黒曜石製の石鏃。中央部より先端は欠損し、基部が大きく抉れている。縄文時代の石器である。

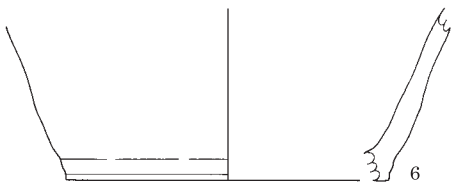
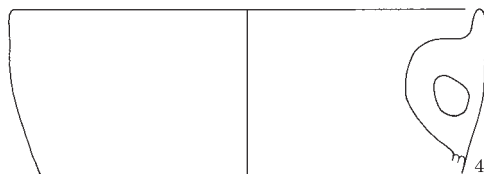
SB01



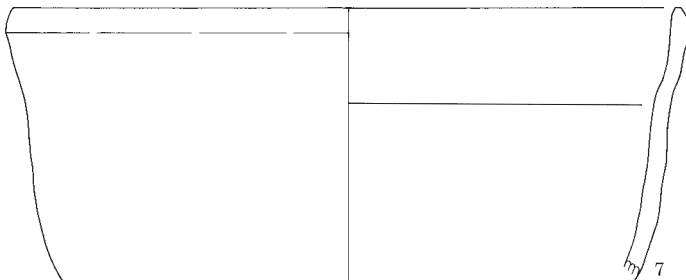
SB02



SB03



SK01



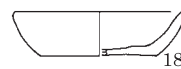
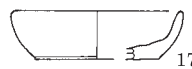
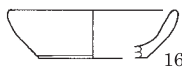
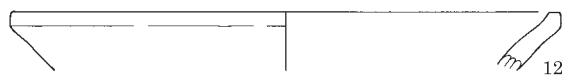
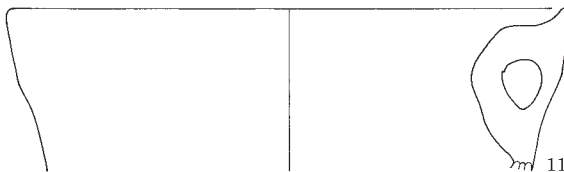
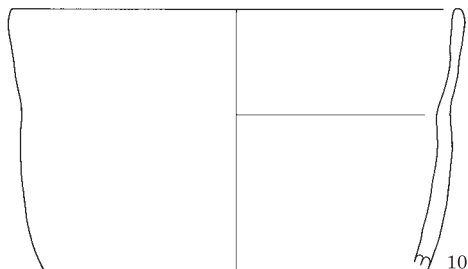
ST01



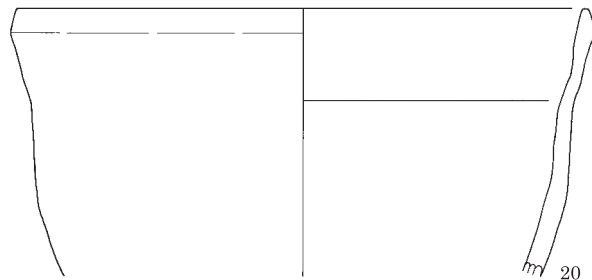
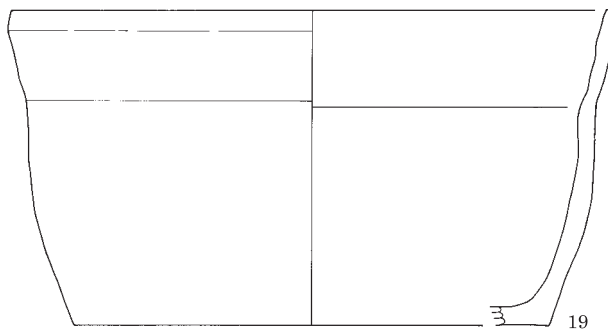
SK03



SD01



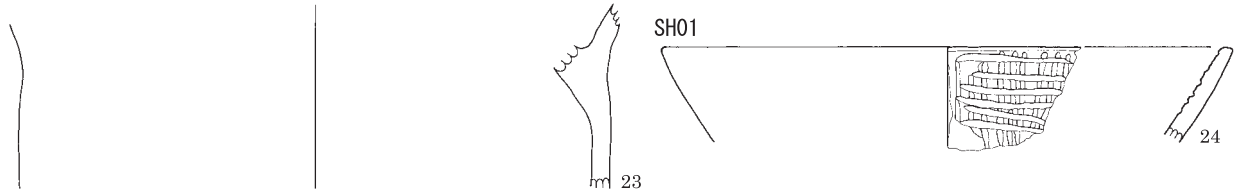
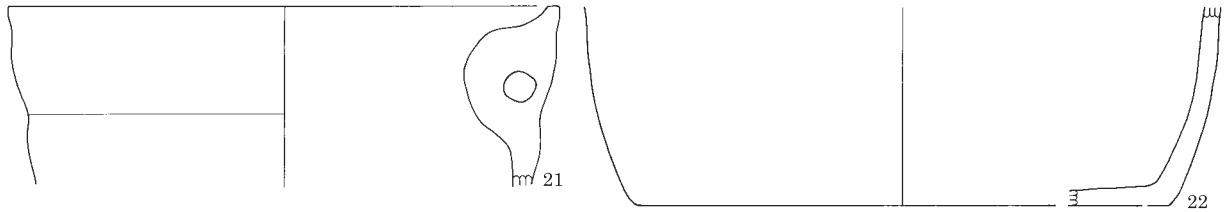
SQ01



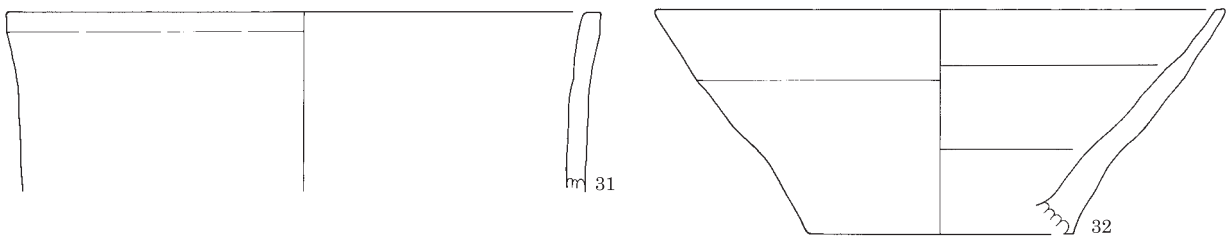
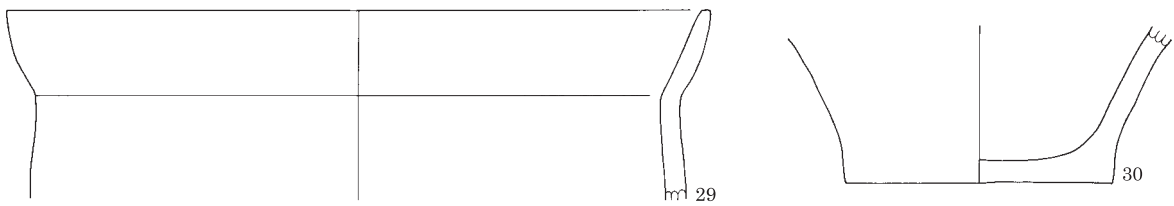
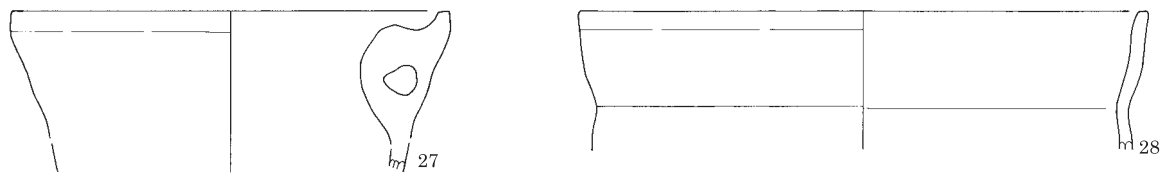
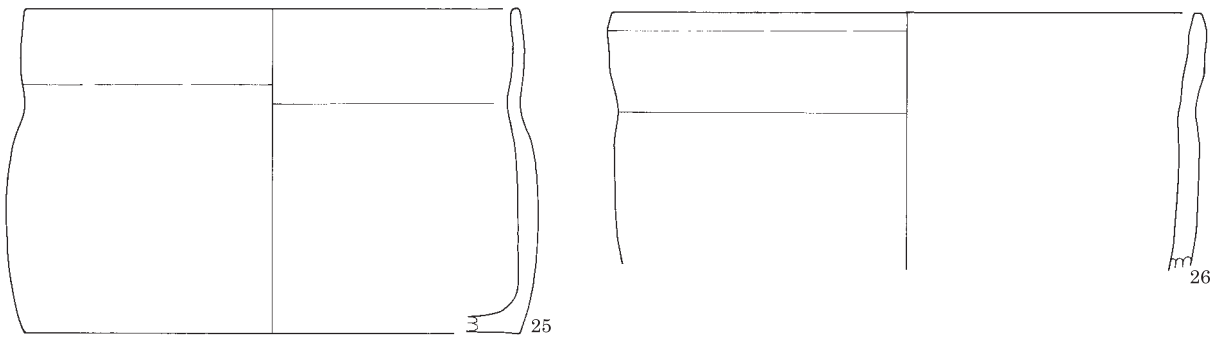
0 (1:4) 10cm

第14図 出土土器1

SQ01

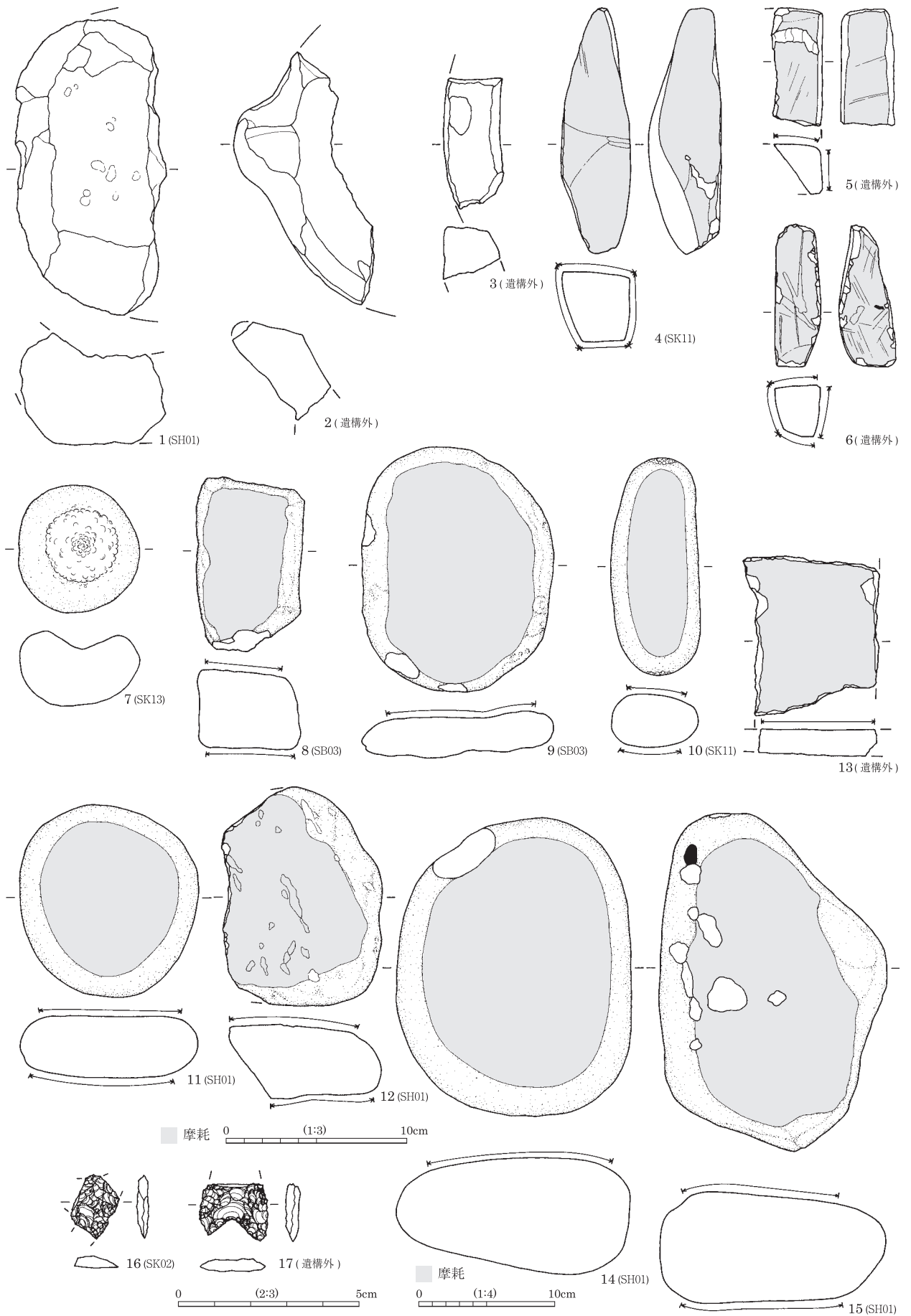


遺構外



0 (1:4) 10cm

第15図 出土土器2



第16図 出土石器

## 第5章 科学分析

### 1. 放射性炭素年代測定

#### (1) 分析目的

新城峰遺跡では、中世後期室町時代の竪穴状建物跡が3軒検出された。この建物跡は等高線に沿って並ぶように検出され重複関係もないことから、同時期もしくは短期間に形成された可能性が高い。そこで、建物跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより、建物跡の存続期間の数値年代データを得るために実施した。

#### (2) 分析試料・結果概要

新城峰遺跡で検出した竪穴状建物跡の埋土及びピットから採取した2点の年代測定をAMS法で実施した。資料内容と測定結果は以下のとおりである。

SB01埋土採取の炭化材(PLD-28252)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $290 \pm 20^{14}\text{CBP}$ で、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1521-1592calAD (62.2%) および1620-1653 calAD (33.2%)となる。これは16世紀前半～末あるいは17世紀前半～中頃の時期となり、出土土器の年代観と整合するものと言えよう。

一方、SB02ピット3採取の炭化材(PLD-28253)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $1340 \pm 20^{14}\text{C BP}$ で、 $2\sigma$ 暦年代範囲が649-690calAD (94.2%) および753-759 calAD (1.2%)となる。7世紀後半～末の時期となる。この値は遺構の時期とは整合しない。試料を採取したピットがSB02とは別の遺構と解釈しても、遺跡内からはこの時期の遺構や遺物は確認されておらず、近接する古代のSK03出土遺物の年代観より古いものとなる。

今回の年代測定では、2点の内1点は調査所見と整合する値が得られたが、もう1点についてはより古い値で、整合しない値となった。整合しない試料については解釈が難しい点もあるが、ここでは中世後期の年代測定の成果として提示しておく。今後も概期の測定資料が増加され、更に検討されていくことが望まれる。

#### 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-28582	$-32.71 \pm 0.26$	$290 \pm 19$	$290 \pm 20$	1527-1555 calAD (42.7%) 1633-1648 calAD (25.5%)	1521-1592 calAD (62.2%) 1620-1653 calAD (33.2%)
PLD-28583	$-32.72 \pm 0.20$	$1339 \pm 18$	$1340 \pm 20$	657-676 calAD (68.2%)	649-690 calAD (94.2%) 753-759 calAD (1.2%)

## 第6章 総括

本報告書は防災・安全交付金（道路）事業、国道254号立科町宇山バイパス建設に伴って実施した新城峰遺跡の調査成果である。

新城峰遺跡は当初、遺跡所在の地字名などから中世山城に関係する遺跡ではないかと考えられていた。しかし、調査では尾根頂部にみられた高まりが、現代の薬用人参の畑耕作に伴う盛土と確認され、山城に関係する遺構は検出されなかった。

一方、尾根の東斜面では竪穴状建物跡や掘立柱建物跡などからなる中世集落の一端が検出された。

遺構は尾根の頂部から東側斜面の上部で検出され、斜面が急となる東側斜面下部や北西側急斜面には広がっていない。なお、調査範囲外となる尾根南斜面でも過去に内耳鍋が出土していたことが地元関係者からの聞き取りで明らかとなり、新城峰遺跡の集落は尾根の南側まで広がっていた可能性がある。また、新城峰遺跡周辺には似たような尾根が幾つも存在する。現在では荒れ地となってしまっているが、こうした尾根にも新城峰遺跡と同じような小規模な集落が形成されているのかもしれない。

竪穴状建物跡は3軒が等高線に沿って並ぶように配置していて、切り合い関係もみられないことから、同時期に構築されていた可能性があり、数軒の竪穴状建物跡と掘立柱建物跡からなる小規模な集落が短期間に営まれていたと考えられる。

出土遺物は大半が煮沸具の内耳鍋で、これ以外には少量の鉢と土師質皿がある。内耳鍋はほとんどが同じ形態を示す。すなわち、胴部が底部から直立し、口縁部との境でやや括れるようになり、口縁部は再び直立する器形を呈する。この内耳鍋は、今までの研究から16世紀後半に位置付けられるものと言えよう。土師質皿は直径10cm程度の小形のもので大半が大形のは少ない。また、陶器は大窯産の稜皿が1点出土したのみで陶磁器類は非常に少ない。

こうした遺物の状況からも、新城峰遺跡の形成された時期は短い期間であったと考えられる。

新城峰遺跡が営まれた16世紀後半、立科を含む佐久地域は武田氏が進攻し、武田氏滅亡後には織田氏が進出、さらに織田氏滅亡後は北条氏・徳川氏が進出するなど、不安定な情勢であったことがうかがえる。新城峰遺跡に一時的に居を構えた人々は、こうした戦火を逃れてきたものかもしれない。遺跡南東の山裾に所在する津金寺編纂の「津金寺の歴史」によれば、新城峰一帯の中世津金寺の裏山はアジュール（聖域、避難所などの意味をもつ特殊な場所）となり周辺住民などのかけこみ避難所的な場所であったと記載されている。新城峰の集落が形成された要因は特定できないが、当時の人々の生きざまの一端を新城峰遺跡は表わしているのではないだろうか。

新城峰遺跡の調査は、立科町では初めてのの中世集落の調査となった。今後は考古学的所見だけでなく、文献資料との対比などをおして立科町を含む佐久郡や東信地方の中世史がより明らかにされていくことを期待し、調査成果が活用されることを望みたい。

### 引用・参考文献

立科町教育委員会 1990『大庭遺跡』

立科町教育委員会 1994『龍田遺跡』

立科町 1997『立科町誌』

津金寺の歴史刊行会 2009『津金寺の歴史』





# 写真図版





遺跡全景 (真上より)



遺跡全景 (西上空より)



遺跡遠景 (東より)



調査前の状況 (東より)



SB01 (北より)



SB02 (東より)



SB02 銭貨出土状況 (西より)



SB03 (東より)



ST01 (西より)



ST01 P4 断面 (南より)



SK01 (北より)



SK02 (東より)



SK03 (東より)



SK10 (東より)



SK11 (東より)



SK13 (東より)



SD01 (西より)



SD02 (東より)



SQ01 (北より)



SH01 (北より)



畑跡調査前の状況（南より）



畑跡（東より）



畑跡断面（南東より）



南壁断面（北西より）



西5T（北西より）



遺物出土状況（南より）

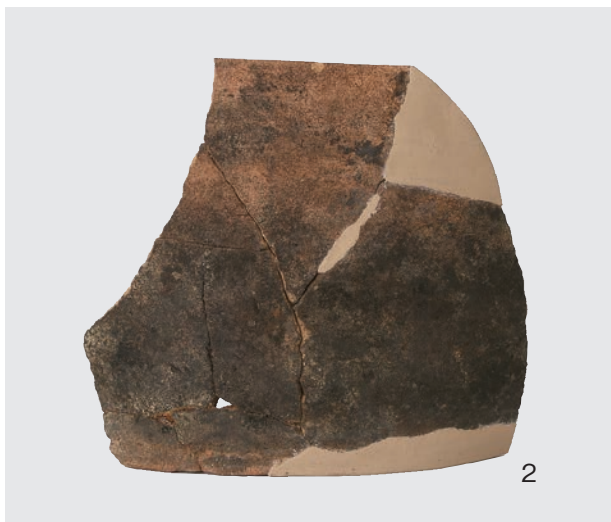


作業風景



法面掘削作業

- 1 SQ01 (14-19)
  - 2 遺構外 (15-25)
  - 3 SQ01 (14-20)
  - 4 遺構外 (15-32)
  - 5 遺構外 (15-30)
  - 6 SH01 (15-24)
  - 7 SD01 (14-18)
  - 8 遺構外 (15-33)
- (S=1 : 3)



- 9 SK11 (16-4)
  - 10 遺構外 (16-6)
  - 11 SK13 (16-7)
- (S=1 : 3)
- 12 SB02
- (S=2 : 3)





# 報告書抄録

ふりがな	あらじょうみねいせき							
書名	新城峰遺跡							
副書名	防災・安全交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 国道 254 号立科町宇山バイパス -							
シリーズ名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	109							
著作者名	廣瀬 昭弘							
編集機関	（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL 026-293-5926							
発行年月日	2016 年 3 月 18 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あらじょうみねいせき 新城峰遺跡	ながののけんたてしなまち 長野県立科町 おおあさやまべあさあら 大字山部字新 城峰631ほか	20324	128	36° 16' 34" (世界測地系)	138° 17' 50" (世界測地系)	20140722 ~ 20141113	4.664	防災・安全交付 金（道路）事業 国道 254 号立科 町宇山バイパス
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
新城峰遺跡	集 落	中世	竪穴状建物跡 3 掘立柱建物跡 1 土坑 16	内耳鍋、土師質皿、稜皿 砥石、磨石 銭貨 1 枚				
要 約	<p>新城峰遺跡は立科町山部に所在し、周囲を谷に囲まれた尾根上に立地する遺跡である。調査の結果、尾根頂部から東側緩斜面で中世の集落跡が発見された。</p> <p>検出遺構は竪穴状建物跡 3 軒、掘立柱建物跡 1 棟などである。竪穴状建物跡は尾根頂部からやや下ったところに 3 軒が南北に並ぶように検出された。掘立柱建物跡は竪穴状建物跡より斜面上部の尾根頂部付近で検出され、2 間×3 間で柱跡に扁平礫を置いたものもある。</p> <p>出土遺物は少なく、殆どが内耳鍋で少量の土師質皿がある。陶磁器類は大窯の稜皿が 1 点出土したのみである。他に銭貨が 1 枚出土した。</p> <p>検出遺構の状況や出土遺物からみて、新城峰遺跡の中世集落は 16 世紀後半の短期間に営まれた小規模な集落といえる。</p>							

平成 28 (2016) 年 3 月 18 日 発 行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 109

**新城峰遺跡**

防災・安全交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

国道 254 号 立科町 宇山バイパス

発行者 長野県佐久建設事務所  
（一財）長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4  
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157  
E-Mail info@naganomaiibun.or.jp

印刷者 明和印刷株式会社  
〒 380-0943 長野県長野市安茂里 2161-2  
TEL 026-226-5311 FAX 026-228-0799